

<b>Title</b>	NEWSLETTER 聖学院大学総合研究所 : Vol.21, No.3, 2011
<b>Author(s)</b>	聖学院大学総合研究所
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.3 : 0-41
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3522">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3522</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## NEWSLETTER

## 聖学院大学総合研究所

Seigakuin University  
General Research Institute

Vol. 21, No. 3, 2011

## [巻頭言]

- 1 稲田敦子  
歴史の深層を耕す

## [研究ノート]

- 2 高橋義文  
ラインホルド・ニーバー「秘儀と意味」をめぐって
- 7 高 萬松  
「1973年韓国キリスト者宣言」の作成経緯とその意義
- 12 松本 周  
H.G.アンダーウッド宣教師と韓国そして日本

## [報 告]

- 15 藤掛 明  
2010年度 牧会心理研究会報告
- 16 藤掛 明  
2010年度 グリーフケア・ルーム年報
- 17 いかに心の世界を学ぶか
- 20 田澤 薫  
永井理恵子氏報告「児童学でよむ デリック・ブルーナの世界」
- 23 松本 周  
韓国・長老会神学大学校との交流—現状と今後—
- 24 宮本 悟  
ミャンマー・カレン族難民におけるキリスト教(1)
- 27 豊川 慎  
イギリス短期留学記—キール、アムステルダム、ケンブリッジ
- 31 ヴィクトリア時代思想セミナー

## [共同研究報告]

- 32 ドイツの基本法と基本権—Grundrechte im Grundgesetz für die BRD
- 32 キリスト教の死生観
- 33 ニーバー「秘義と意味」(Mystery and Meaning)をめぐって

## 総合研究所News

- 35 牧会サマーセミナー「傷ついた魂の癒やしを求めて」
- 37 カウンセリング研究センター講演会「いかに心の世界を学ぶか」  
アンケート結果

# 《 総合研究所の活動 2011年8月1日から10月31日 》

共同研究	回数	開催日	研究発表者	主 題	参加人数
＜児童＞における「総合人間学」の試み研究	第3回	9月28日	永井理恵子(聖学院大学准教授)	児童学で読むディック・ブルーナの世界	11名
牧会心理研究(第一グループ)	第2回	9月15日	藤掛明(聖学院大学大学院准教授)	—	5名
牧会心理研究(第二グループ)	第2回	10月7日	藤掛明(聖学院大学大学院准教授)	—	8名
牧会心理研究講演会	第1回	10月21日	堀 肇(鶴瀬恵みキリスト教会牧師、聖学院大学総合研究所カウンセラー)	心理療法における愛と癒やし	35名
スピリチュアルケア研究講演会	第1回	10月13日	堀 肇(鶴瀬恵みキリスト教会牧師、聖学院大学総合研究所カウンセラー)	ケアする者のスピリチュアリティ	35名
ニーバー研究会	第2回	10月3日	高橋義文(聖学院大学大学院教授)、コメンテータ:大木英夫(聖学院大学大学院長)	秘儀と意味	27名

講座・シンポジウム	日時	講演者・シンポジスト	主 題	参加人数
第3回牧会サマースミナー	9月2日	堀 肇(鶴瀬恵みキリスト教会牧師、聖学院大学総合研究所カウンセラー)	傷ついた魂の癒やしを求めて	14名
臨床死生学シンポジウム	10月28日	柳谷明(山形県六日町教会隠退牧師)、大木英夫(聖学院大学大学院長)、小友聡(東京神学大学教授)、平山正実(聖学院大学大学院教授)	東日本大震災を神学的にどのように受け止めるか	143名
第8回ピア・スーパービジョン	10月15日	大野和男(NPO法人精神障害者のあすの福祉をよくする三浦市民の会びあ三浦理事長、聖学院大学非常勤講師)	ソーシャルワーカーとしての歩みとびあ三浦の活動	24名
日韓学術セミナー	10月29日	康仁徳(聖学院大学総合研究所特命教授)、鈴木光男(外務省大臣官房総務課警備対策室長)、宮本悟(聖学院大学総合研究所准教授)	朝鮮半島情勢と日本の対応	50名

人間福祉スーパービジョンセンター	スーパーバイザー	実施日	人数
2011年度グループ・スーパービジョン	埼玉県 柏木昭(聖学院総合研究所名誉教授)	9/9、9/21、10/14	9名
	石川県 柏木昭(聖学院総合研究所名誉教授)	8/3、9/14、9/29、10/3、10/18	10名
個別スーパービジョン	田村綾子(聖学院大学准教授)	8/3、9/14、9/29、10/3、10/18	5名
	田村綾子(聖学院大学准教授)	8/23	1名
9月21日	スーパービジョンセンター委員会	活動報告、10/15ピア・スーパービジョンについて	9名
10月15日	スーパーバイザー情報交換会		6名

カウンセリング研究センター心理相談	カウンセラー	実施日(月曜日)	人数
赤坂グリーフケア・ルーム	藤掛明(聖学院大学大学院准教授)	8/8、8/15、8/22、9/12、9/26、10/3、10/24	16名
	村上純子(聖学院大学非常勤講師、カウンセラー)	8/29、9/26、10/3、10/17、10/24、10/31	9名

日韓現代史研究センター会議	
10月4日	1)10/29学術セミナーについて、2)11/25～26長老会神学大学校との共同研究、セミナーについて、3)2/25学術シンポジウムについて

聖学院キッズ英語	講師	実施日	人数
幼稚園クラス	ブライアン・バード(聖学院大学総合研究所特任講師)、 藤原真知子(同)、	9/5、9/6、9/12、9/13、9/20、10/3、10/4	36名
小学生クラス	ジャスティン・ナイティンゲル(同)、 西嶋小百合(聖学院大学総合研究所委託講師)、 山根真由美(同)	9/2、9/6、9/7、9/9、9/13、9/14、9/16、9/20、9/21、9/27、9/28、10/4、10/5、10/7、10/11、10/12、10/14、10/18、10/19、10/25、10/26	69名

Faculty Meeting	
9月14日	研究活動の目的について。特に日本再建との関わりで
9月28日	夏休みの研究活動の報告
10月12日	李鍾馨元長老会神学大学校総長の葬儀に参列して

聖学院大学出版会	著者	書名	副題	定価
9月10日刊行	岸川洋治・柏木昭著	みんなで参加し共につくる	福祉の役わり・福祉のこころ	735円
10月20日刊行	カウンセリング研究センター編	被災者と支援者のための心のケア	—	630円

---

## 巻頭言

# 歴史の深層を耕す

歴史の女神クリオは、ギリシャ神話の女神たちの中で一番はすかしがかりやであり、自らの顔のすべてをめったに出すことはしない。この歴史の女神を主題とした名著のE.ハーバード・ノーマンによる『クリオの顔—歴史随想集』が出版されて、今年で半世紀余の55年となる。

「クリオは大変内気で謙遜な娘でありながら、きわめて仕えにくい主人でもある。しかも彼女は気どり屋である。彼女は、煽動的な新聞やデマゴグがまきちらす劣悪な通貨である常套語や符牒に理解力を曇らされないきわめて平凡な市民にも、また人間の作った制度はいずれ普遍なものでなく社会全般および他の制度にとって相対的なものであっても、たえまない歴史の大きな運動そのものの一部として、微妙に変化し変質するものであると見ることを学んだ学徒にも、ひとしく彼女の愛らしく物思わしげな顔を現わすであろう。」(ハーバード・ノーマン『クリオの顔』全集IV p.188)

ハーバード・ノーマンによる『クリオの顔』の衝撃は、非常に大きいものであった。それは、ノーマンの悲劇的な死によって、より深く心に刻まれたことによるかもしれない。本著の副題が歴史随想集となっていることから明らかなように、序文にある「クリオの苑に立って」をはじめとして、今日に至るまで大きな課題となっている「説得か暴力か—現代社会における自由な言論の問題」、そして原題が「クリオの謙遜について」となっていた「クリオの顔」、「『ええじゃないか』考—封建日本とヨーロッパの舞踏病」などそれぞれの主題のもとに、歴史への洞察が深められている。

クリオは、歴史を内的に深く耕すこと、すなわち歴史の表層では捉えられない部分を掘り下げることがゆえに、他の女神たちのうちで、彼女の信奉者にもっとも重い要求を課したように思われる。ノーマンの主著である『忘れられた思想家—安藤昌益のこと—』では、昌益の『刊本・自然真営道』、『稿本・自然真営道』および『統道真伝』を読み込み、その深層をさぐることによって、クリオによる厳しい要求への最大限の応答を果たしたといえよう。安藤昌益は、幕藩体制下の東北地方の自然災害による飢饉などの危機状況という厳しい現実に対し、その矛盾を身をもって受けとめ、直接生産にたずさわることを「直耕」という形で提起し、現実の「法世」に対置する「自然世」を位置づけた。そこでは「自然」を危機状態に陥らせた状況に対する強い危機意識が基盤となっており、ともに、医師であった昌益による人間の根源的なあり方が問われている。自然の「妙序」を知らず「自然ノ氣行ニ違ルコト」を改めないままの現状に対して、より深く人々の生き方の問題として考えぬぐところに昌益の「自然世」が成立した。ノーマンによる昌益研究は、まさに「歴史の女神クリオの社に真の尊崇をささげた」あり方であり、歴史の深層を耕すクリオの課題を想起させてくれるのである。

# ラインホールド・ニーバー「秘義と意味」をめぐって

高橋義文

〔本稿は、10月3日開催された「ニーバー研究会」での発表のレジュメである。ニーバーの論考「秘義と意味」の訳は、『聖学院大学総合研究所紀要』50号に掲載されているので、それを読む際の参考にしていただければ幸いである。〕

## はじめに

「秘義と意味」は、ニーバーの思想の基本の一面を表現しているきわめて重要な論考である。ニーバーの神学的認識論の特徴を示していると言ってよいが、それはニーバーの思想の本質に関わる議論である。

この論文は、1958年に出版された『敬虔で世俗的なアメリカ』と題されたニーバーの論文集（Reinhold Niebuhr, *Pious and Secular America*. New York: Charles Scribner's Sons）。<sup>1</sup>に、最終章第9章として収録されているものである。

その論文集の序文によれば、この論考は、「ユニオン神学大学院とハーヴァード大学でなされた説教に基づく」（Ibid., vii.）ものとされているが、公刊されたのは本書が初めてである。ただし、後述するように、その趣旨は、1958年以前に、同名の題をもつ論文をはじめ、幾つもの著書や論文で、繰り返し論じられており、それらを踏まえてまとめられたものと考えてよいであろう。

## I. ニーバーの同趣旨の議論

ニーバーは、「秘義と意味」の論考と趣旨が重なる議論を、著書や他の論文でも繰り返している。その主題を含み、それに関わる代表的な論文・著書は以下の通りである。

- ・“Truth in Myths,” J. S. Bixler, ed., *The Nature of Religious Experience: Essays in Honour of D. C. Macintosh*. New York: Harper, 1937. 117-135.<sup>2</sup>

神話の概念を論じた最初のまとまった論文。

ニーバーのイェール時代の指導教授マッキントッシュへの献呈論文集に寄稿したものであるが、出版直後献呈された当のマッキントッシュから激しい批判を浴び、それによっても注目された論文である。<sup>3</sup>

- ・*Beyond Tragedy: Essays on the Christian Interpretation of History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1937.

この書では、永遠と歴史のパラドクスの関係が豊かに魅力的に展開されている。研究者の間では、この書をもってニーバーの神学は成熟した段階に入ったとされる。〔私自身は、成熟したニーバーは、その前の著書『キリスト教倫理の解釈』（1935年）に始まったと見るのがより妥当だと考えている。〕

- ・*The Nature and Destiny of Man*, Vol. I: *Human Nature*. New York: Charles Scribner's Sons, 1941; Vol. II: *Human Destiny*. Charles Scribner's Sons, 1943

ニーバーの主著（ギフォード講演）。第1巻では意味の問題が論じられ、秘義の概念は第2巻に多く出ている。当然であるが、「秘義と意味」（58年）と重なる議論が多い。

- ・“Mystery and Meaning,” *Discerning the Signs of the Times*. New York: Charles Scribner's Sons, 1946. 152-173.<sup>4</sup>

同名の題をもつこの論文は、同じ聖句の一つを冒頭に掲げ（コリント第一 13: 12）、内容は同じ趣旨であるが、論述の仕方が異なり、聖句をふんだんに用い、1958年の論文と比べて説教の体裁を多く残している。

- ・“Coherence, Incoherence, and Christian Faith,” *The Journal of Religion*, 31, no. 3 (July 1951),

155-168.<sup>5</sup>

議論の仕方は異なるが、その内容には「秘義と意味」（58年）と重なるところがある。

・ *Faith and History: A Comparison of Christian and Modern Views of History*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.

「秘義と意味」（58年）と重なる議論が、*The Nature and Destiny of Man* よりもはるかに多く見られる。たとえば、第3章では、時間と歴史をめぐる秘義と意味や、創造の秘義について論じられている。

「秘義と意味」（1958年）の論考は、したがって、以上のような同趣旨の議論の後になされたものであり、それらを踏まえて、直接この主題でまとめられた、より洗練された論考と言ってよいであろう。

## Ⅱ. 「秘義と意味」の概要

### ○ 要旨

- ・ 人間存在の究極的な問題は、それに意味があるかどうか、それが理解できるかどうか、である。
- ・ 人間存在は、矛盾と不調和に満ち、秘義の半影に包まれている。秘義にもかかわらず意味があり、意味は秘義に覆われている。それは、人間をめぐる、創造、自由、罪の三つ秘義分析に明らかである。
- ・ それゆえ、その正確な理解は、少なくとも合理主義や神秘主義では不可能である。合理主義は、理性に頼るため理性を超えた秘義をとらえることができず、神秘主義は、秘義を認めはするが秘義に隠された意味をとらえることができないからである。
- ・ 人間存在をめぐる秘義と意味の解明の手がかりは、「やみの中に輝く光」（ヨハネ1・5参照）として受け止められるキリストの出来事におけ

る啓示への信仰である。秘義に包まれている意味が、秘義の存在を損なうことなく明らかとすることができるからである。

- ・ この洞察は、謙虚な信仰生活の証しによってのみ立証される。しかし、その洞察は、人間の普遍的な経験に合致しており、一定の普遍的妥当性をもつものである。

## A. 人間存在をめぐる秘義

### 1. 創造の秘義

合理的理解の試み

- ・ アリストテレス—「第一原因」「至高の動者」の措定による合理的把握。存在は永遠的な構造を持つとする。
- ・ 近代科学—進化の過程における無限連鎖による秘義の克服。
- ・ 一部の宗教—創造を万物の原因についての科学的分析の代用とする。

以上は、いずれも意味の領域と合理的理解の違いを理解していない。

神秘主義的理解の試み

- ・ 新プラトン主義（プロティノス）—「派生」（流出）の論理によって合理性の限界をある程度承認。時間的世界を「一者」の頽落・派生とみなす。存在の根拠は、未分化の「一者」にあるとする。

この立場は、創造の秘義性を確保はできるが、それによって、時間的世界を悪いし仮象とみなすことになる。つまり人間存在の意味が無視されてしまう。

キリスト教の立場

- ・ 創造を善とみなす。
- ・ 創造を「無からの創造」とみなす。合理的には不条理だが、秘義を確保する。時間的世界の事象は「無制約的なもの」に関わっており、それゆえに意味も確保されるが、それは合理的に



理解することが不可能であることを気付かせる。

- ・聖書の創造神話には、「永遠の神話」の深遠さがあり、その神話は、創造の秘義を擁護する。

創造の秘義は、人間存在に直接作用することはない。それが究極的な自由の秘義の象徴となると、はじめて人間の経験と直接かわりをもつようになる。

## 2. 自由の二つの秘義とその特質

### ① 責任ある自由の秘義

- ・この秘義は、われわれ自身を内省することで明らかになりうる。自分が因果の流れを超越していることを知っているからである。
- ・この自由は、被造物としての有限性にもかかわらず存在する。
- ・しかし、この世界には物事を決定するさまざまな条件があり、ある程度予想ができる状況があるが、それは自由があることを否定するものではない。そうした相対的決定論的状况にもかかわらず自由の次元は存在する。
- ・その点、科学は決定論的であって、この自由をまったく認めない。
- ・他方、良識、芸術、法、歴史学といった分野は、この自由を認めている。

### ② 罪の秘義

- ・この秘義は、人間の経験において確証される。
- ・この秘義は、人間が自らの自由を自らの目的のために、誤用、悪用せざるをえないという秘義である。
- ・罪（自己執着）は、自己を場として生じるのであって、自己の欲望や誘惑や無知などからではない。罪は、人間の自由すなわち創造の善の墮落である。すなわち、人間の「悲惨さ」と「尊厳」の源がともに人間の自由にあるのである。
- ・罪は、人間の有限性に関わっている。罪は、有限性の事実から逃れ、それを隠そうとする

人間の空しい努力の結果である。

### ③ 人間の自由の特質

- ・人間の自由の二つの秘義は、人間の自由の特質を明らかにしている。
- ・人間は、<sup>スピリット</sup>精神〔霊〕として、自由であるとともに時間の流れのなかにある、時間の中にありながら時間を超えるインコングルーアスな（不調和な）存在である。
- ・この自由は、知性（理性）や身体を超越する。
- ・自らの悲惨さを知っている存在ととらえるパスカルらの人間理解と共通する。

以上の責任ある自由も罪の自由も、合理的に説明することは不可能である。

## B. 秘義の解明

人間存在が、以上のように、合理主義によっても神秘主義によっても説明不可能な、秘義に包まれているとすると、人間存在の意味はどのように解明されるのだろうか。

### ① キリストの出来事—秘義への答え

- ・神秘宗教は、神の秘義を肯定することによって、人間の二つの秘義を解明しているかのように見える。自由の秘義は、自由を有限性から解放し、未分化の実在の一部とみなすことによって、人間の罪の秘義は、悪を人間自己の特殊な形態と見なし、そこからの解放によって、解決されとする。
- ・ところが、聖書は、歴史上の出来事のうちに、歴史の意味の手がかりとなる啓示の深さと高さ、「やみの中に輝く光」を見分けようとする。
- ・歴史における諸啓示の集約・頂点を、苦難のメシアのドラマ「キリストの出来事」にみる。
- ・メシア待望の歴史に照らして、キリストとその十字架の死が、神の憐れみと正義の啓示、人間の罪の普遍性、道徳問題解明の不可能性の究極的な啓示・象徴である。

- ・キリストの啓示のうちに、歴史の目的に関わる人間存在の秘義と創造の秘義への手がかりの要点と頂点がある。
- ・キリストの啓示は、三つの秘義を照らす光である。それは、創造の秘義への信仰による手がかりである。
- ・この信仰に、人間の歴史的存在に意味があること、われわれの存在が自然の随伴現象でもなければ自然の不要の付着物でもないことが示されている。
- ・この十字架のキリストに象徴される愛は、創造の秘義そのものである。それは信仰の知恵（神の恵み）であり、それは経験に基づいて意味の構造を確定し、経験が実在それ自体の構造に関わっていると主張する。
- ・キリスト教信仰は、創造の秘義を前提としている。それが存在の根拠である。
- ・キリストの出来事は、人間の窮境—罪と自由を自己のために利用する人間の傾向と自己執着とからなる—への答えである。これが、「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られたことの意味であり、福音である。
- ・信仰の知恵には、感傷も冷笑主義もない。いかなるユートピア的理想主義もない。人間の利己主義をありのままに認めるのである。

## ② 倫理

- ・キリストの愛に裏付けられた究極的な規範は必要である。キリストは「第二のアダム」として規範的な意味も持つからである。
- ・しかし、カトリック倫理や自然主義的ヒューニズムやリベラルなキリスト教の理解は、否定されるべきである。
- ・しかし、この世界には、歴史を超える意味の接線は存在する。そこに倫理の可能性がある。
- ・キリスト教の規範は、自由の秘義に基づく人間の自由が働く愛の予測できない（未決定的）可能性の象徴として、倫理的生の超越的終末論的頂点の象徴として、必要である。

## ③ 意味の手がかりとしての信仰の立証

- ・秘義の中に意味の手がかりを見つける信仰の正当性を立証する唯一の方法は、生活の中でそれを証しすることである。
- ・それは、自己矛盾の窮境が普遍的であるとの認識と、罪への神の赦しへの感謝とから導き出される愛である。感謝と思いやりは、人間への悲観主義から生まれる。
- ・その確信が、自己を絶望から「新しいいのち」へと引き上げる。
- ・その意味において、キリストは、人間存在の秘義への究極的な答えである。
- ・その答えは、思弁的なものではなく、内なる経験に委ねられるべきものである。

## Ⅲ. 論考「秘義と意味」の意義

この論文は、ニーバーの思想の本質的な特徴が凝縮されてあらわれている論考である。それはとりあえず以下の点に見出せる。

### 1. 意味の問い

- ・ニーバーにおける〈意味の問い〉の重要性。
- ・「人間実存と歴史の意味探求に注意深い関心をいだき続けた解釈学的思想家としてのニーバー」（千葉真『現代プロテスタンティズムの政治思想—R・ニーバーとJ・モルトマンの比較研究』新教出版社、1988年、32頁）。

- ・ニーバーにとってキリスト教は、人間存在と歴史に意味を見出し、与える宗教。意味を持つ歴史への確信。

### 2. 秘義と意味の弁証法と人間の精神<sup>スピリット</sup>の理解の独自性

- ・創造の秘義にもとづく自由と罪。
- ・秘義が意味に与える意味

“Mystery does not annul meaning but enrich it. It prevents the realm of meaning from being reduced too simply to rational intelligibility and thereby given a false center of meaning in a relative or contingent historical force or end.”  
(*Faith and History*, 103)



- ・人間の精神<sup>スピリット</sup>の理解。別な著書で、自己超越的自己、根源的自由 (radical freedom) とも表現される。それは「神の像」 (NDM I, 55)、「原義」 (justitia originalis) (NDM I, ch.X) であるともされ、「予測できない (未決定的) 自由」 (indeterminate freedom) の基盤となる。

### 3. キリストの出来事 (啓示) の決定性

- ・キリストの出来事とりわけ十字架の中心性
- ・十字架を、メシアニズムの文脈を踏まえて主張。罪が歴史の問題であるゆえに歴史は意味・救済を求め、メシアニズムを生み出す。
- ・この十字架理解から、世俗のキリスト教的理想主義と厳しく一線を画す、独特の現実主義的倫理を提示。
- ・人間存在の秘義の分析等から論議を始めるが、実は、キリストの出来事から見ている。十字架はニーバー神学の核である。
- ・その点で、ニーバーを単純に神学的リベラリズムの範疇に置く近年の動向 (フォックス、ハワーワス、ドーリエンら) には問題がある。自らの神学的確信を、19世紀の神学的リベラリズムを拒否し、同時に伝統的保守的キリスト教も否定しながら独自に展開したところに、ニーバーの特徴がある。

### 4. 弁証学的意義

- ・人間存在と歴史の理解についてのキリスト教の洞察の弁証の試みとなっている。
- ・合理主義や神秘主義の哲学思想にたいし、もう一つの実在理解を示し、その妥当性を主張している。とくに自由に根を持つ罪の秘義は、普遍的に経験されるものであるゆえに、それへの答えは、一つの立場を占めていると主張している。
- ・この見方が、ニーバーのキリスト教的政治的現実主義の根幹をなしている。ここに、ニーバーの現実主義の深みの次元が見られる。「秘義と意味」は、ニーバーの神学はもとよ

り、その現実主義を取り上げる際に、忘れてはならない議論である。

1 この論文集は、1956-57年に発表された諸論文および初出論文 (「秘義と意味」など) からなっているが、そこには、それぞれかなり長文の重要な論文が収録されている。たとえば、「敬虔で世俗的なアメリカ」 (『アトランティック・マンスリー』誌100周年記念号〈1957〉収録論文)、「アメリカにおける高等教育」 (ニーバーの貴重な高等教育論)、「自由と平等」 (英国、フランス、アメリカにおける政治社会倫理)「アメリカの黒人への国家、共同体、教会の正義」 (公民権運動初期の人種問題)、「西洋文明におけるキリスト教とユダヤ人の関係」 (ユダヤ教神学大学院とユニオン神学大学院の合同教授会での発表〈1957年2月〉) などである。

2 これは、その後、以下のいくつかの文献に転載されている。Mandelbaum, Gramlich and Anderson, eds., *Philosophic Problems* (New York: The Macmillan Co., 1957); Gail Kennedy, ed. *Evolution and Religion* (Boston: D. C. Heath, ) ; Reinhold Niebuhr, *Faith and Politics: A Commentary on Religious, Social, and Political Thoughts in a Technological Age*, ed. by Ronald H. Stone (New York: George Braziller, Inc., 1968)。

3 マッキントッシュの議論については以下を参照。高橋義文『ラインホルド・ニーバーの歴史神学—ニーバー神学の形成背景・諸相・特質の研究』 (聖学院大学出版会、1993年) 135-141頁。

4 この論文も以下に転載されている。その際、編者によって小見出しがつけられている。*The Essential Reinhold Niebuhr: Selected Essays and Addresses*, ed. and Introduction by Robert McAfee Brown (New Haven and London: Yale University Press, 1986)。

5 この論文も以下に転載されている。*Union Quarterly Review*, 7, no. 2 (January, 1952), 11-24; Reinhold Niebuhr, *Christian Realism and Political Problems* (New York: Charles Scribner's Sons, 1953; *The Essential Reinhold Niebuhr: Selected Essays and Addresses*, ed. and Introduction by Robert McAfee Brown (New Haven and London: Yale University Press, 1986)。

(たかはし・よしぶみ 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科長、教授)

# 「1973 年韓国キリスト者宣言」の作成経緯とその意義

高 萬松

## 1. 「73年宣言」とその反響

1973年5月20日に「1973年韓国キリスト者宣言」（以下、「73年宣言」と略記）が発表された。それは独裁体制にある韓国キリスト教会の信仰告白としてドイツの「バルメン宣言」<sup>1</sup>に比べられ、韓国民主化闘争の信仰宣言とも理解された。また「アジアの声として、キリスト者の立場と『アジア』大陸にある国の情況だけではなく、キリスト者の闘争すべき対象が何であるかを明らかにした文書」<sup>2</sup>だという評価もある。それはラインホルド・ニーバー（Reinhold Niebuhr）が編集委員長として創刊された*Christianity and Crisis*の1973年7月9日号に発表された<sup>3</sup>。「権威のある雑誌が高く評価してコメントまで掲載してくれましたので、これは完全にユニバーサル・クリスチャン・デklaration [universal Christian declaration] になってしまいました」<sup>4</sup>と呉在植が言うように、それがきっかけになってこの宣言が世界に知られるようになったと思われる。

「73年宣言」の反響について代表的なものを挙げよう。まず日本において、『福音と世界』（1974年8月号）の巻頭言は「73年宣言」の底に「預言者の精神」が流れていると見ている<sup>5</sup>。最近では富坂キリスト教センターの2011年3月発行の『紀要』には、東海林勤「1973年韓国キリスト者宣言」と題する論考が収録されている。そこでは、その宣言が出るまでの韓国の状況、すなわち朴正熙政権の下での経済、社会的状況に関する見解を述べている。そしてこの論考の「『1973年韓国キリスト者宣言』の成り立ち」という章では作成経緯が作者たちの役割を中心に説明されている。残念ながら、東海林の論考にはその論説のもとになっている資料の出典を明記していないので検証できないのであるが<sup>6</sup>、東海林は「73年宣言」の信仰から日本人キリスト者のなすべき業が何であるかを問いかけている。

筆者は韓国における、当時の反響を跡付けるだけの資料をもっていないが、調べたところでは「73年宣言」をとりあげた蔡スイルの「1970年代進歩教会社会参与の神学的基盤」（2003年）と題する論文があることが分かった<sup>7</sup>。この論文では「73年宣言」が「韓国プロテスタント・リベラル」側のものと見なしている<sup>8</sup>。また長老会神学大学の李亨基元教授は『韓国教会と社会的責任』（1997年）で、「73年宣言」は韓国の教会における社会的責任を闡明したものと見ている<sup>9</sup>。

さらにイギリスではマクグラス（A.E.McGrath）編集の*Modern Christian Thought*（1993）において、この宣言が韓国民主化運動における神学的諸文書の中の最も重要な文書の一つと見なされている<sup>10</sup>。この研究ノートでは以上のような反響から、「73年宣言」の神学的背景を明らかにしたい。

## 2. 「73年宣言」の発表された状況とその起草者について

「73年宣言」は当時の状況下、匿名で発表された。以下に紹介する1998年にソウルで開かれた鼎談では、この宣言を歴史的に検証し、発表された状況と起草者を明らかにしている。

鼎談は韓国基督教歴史学会が主催し1998年6月13日に開催された。そこに参加したのは、起草者である池明観（当時、韓国の韓林大学教授）であり、また呉在植（同、韓国鮮明会会長）であり、キリスト教史研究者である徐正敏（同、韓国基督教歴史学会理事）が司会者として参加し、質問と進行を務めている<sup>11</sup>。その他の質問者には韓国教会史研究者の名前も出ている<sup>12</sup>。その鼎談の記録は「73年宣言」の背景を明らかにする歴史資料として価値があるであろう。その記録が韓国基督教歴史学会発行の『韓国基督教と歴史』（第9号、1998年）に掲載されている<sup>13</sup>。ここではこの記録を紹介し、また「73年宣言」の神学的背景などを考察したいと思う。

### 3. 「73年宣言」の内容

分量は日本語で四六版4頁ほどである。特に区分されているわけではないが、大きく5つの部分、つまり、序文、宣言を出す理由、三位一体の告白、当面問題に対する信念、そして具体的行動の宣布、と分けることができる。「73年宣言」の内容の把握のために、当面問題に対する信念の箇所だけを紹介したい。以下のように述べられている。

(1) われわれは具体的な歴史的状況の中で神の御言葉に服従すべきであるとの神の命令をうけている。今日われわれを動かしているのは勝利することを期待する感激ではない。それはかえって神に向かつての罪責の告白からくるものであり、韓国の今日の状況の中で真理を語り、それに従って行動せよといわれる主の命令からくるものである。〔中略〕(3) われわれは解放をめざしたこのような戦いに参与する時、独立をめざして日本植民統治に抵抗した韓国キリスト教会の歴史的伝統を継承するようになる。……また神学的な姿勢において、革命的役割を果たすべくあまりにも敬虔主義的であった事実をよく知っている。しかしわれわれは、われわれの兄弟の何人かが弱いからといってつまずいてはならない。わが教会の歴史的伝統の底にある強い信仰の意志の中で、われわれの神学的信念を求めねばならない<sup>14</sup>。

宣言は、韓国民衆の現実を世界に知らせ、韓国の民主化のために世界に「連帯」を呼びかけようとした狙いがあったと思われる。韓国の現実を知らせるため、当時の状況が厳しい言葉で表現されている。例えば*Christianity and Crisis*においては当時の韓国の状況は戦前の日本帝国主義時代と比較できるほどの警察国家のようだと言っている<sup>15</sup>。そういう言い方は「維新体制」の下での状況を意味する。「維新体制」とは、1972年10月に、

朴正熙が大統領特別宣言を発表し、同年12月27日に「維新憲法」を公布して以来の体制を意味する。つまり「一人永久執権」をもくろんだ体制のことである<sup>16</sup>。「73年宣言」の日本語版においても「維新体制」の下で、良心の自由と信仰の自由が打ち壊され、大衆欺瞞、情報統制、労働者、農民の収奪が行われていると言っている<sup>17</sup>。その一方でこの宣言はキリスト者の信仰告白としての性格も持っており、宣言には罪責を告白し三位一体の神を告白するという特徴が見られる。

### 4. 作成経緯

宣言の末尾に「韓国キリスト者有志教役者一同」となっている。起草者は、当時滞日中の池明観教授<sup>18</sup>、金用福博士（アメリカでの留学を終え、継続研究のため滞日中）、そして都市産業宣教会アジア教会協議会の呉在植幹事であった。草案が金用福によって英語で作成され、それを池明観が日本語と韓国語に翻訳したようである。そして三人で最終的に修正作業をしたと池明観は次のように言う。

確実ではありませんが、[1973年]2月か3月頃に韓国の国内に韓国語の内容を送りました。記憶が確実ではありませんが、文東煥博士がご覧になり、金錫錫牧師もご覧になったでしょう。……朴炯圭牧師も関与されたでしょう。……それで[韓国]国内から承諾を受けました。……その後、[韓国]国内で印刷ができて、私たちに送ってくれました<sup>19</sup>。

引用箇所に出てくる人物たちは次の背景を持っている。文東煥は韓国基督教長老会に属する第一世代の民衆神学者である。金錫錫は韓国基督教長老会の牧師であり、1968年から韓国基督教教会連合会(NCCK)の総務を務めていた。朴炯圭は70年代前半、反政府運動をしたという理由で投獄され、日本にも『教団新報』の言うように、「朴牧

師を支援する東神大卒業生有志の会」が作れるほど知られていた人物である<sup>20</sup>。当時日本に滞在していた韓国知識人グループ、すなわち、「73年宣言」の起草者たちと上記の人物群との間に思想的ギャップが存在していなかったということは確かであろう。

## 5. 起草者が語る、その宣言の意義

次に述べられているように、池明観はその宣言は「韓国教会の全体の考え」と理解している。彼は言う。

私たちは、国内〔韓国〕の教会と国外〔日本〕にいる私たちと別々だと考えたことがなかったので、私たちの考えが国内教会の考えであり、また国内の考えが私たちの考えだと思いました。例えばNCCが総会を開いて決議するわけでもないし、結局危険を覚悟して参与しようとする少数の人々がエクレスシア [ecclesia] (教会) を代表するしかないと考えました。…教会の中堅の立場にあった人々が〔この宣言に〕賛同したと思いました。…これが韓国教会全体の考えだと認めながら進めていきました<sup>21</sup>。

また、次のように敷衍している。「先も申し上げましたようにエクレスシア [ecclesia] というのは結局多難な時代にはエクレスiola [ecclesiola] になると言わないでしょうか？ 小教会とならざるを得ません。難しい時期には十字架を負う少数が教会を代表するしかありません。つまり、そういう時には信仰を告白し十字架を背負って行く人々が全体教会を代表していると思うべきです。数的にのみ考えるべきではないという教会観を持っていました。ポール・レーマンもそのような教会観をもっていました」<sup>22</sup>。

われわれは池明観と異なって、蔡スイルの見解に従って「73年宣言」を「韓国教会の全体の信仰告白」ではなく、「韓国プロテスタント・リベラ

ル」側のものと見なす<sup>23</sup>。というのは「73年宣言」が、これから見るように神学的性格からすれば、韓国教会全体というより民衆神学の先取りとして理解できるからである<sup>24</sup>。

## 6. 「73年宣言」の日本への影響

われわれは「73年宣言」が日本に及ぼした影響として、日本の教会と韓国教会との「連帯」を促したことに注目しておきたい。というのは、民主化運動時代の日韓のキリスト教会の文献には、その運動のために韓国教会との「連帯」という言葉が目立っているからである。その「連帯」の嚆矢はどこにあるであろうか。われわれはそれが「73年宣言」にあると推察する。

「連帯」という言葉の用例であるが、まず個人の例をあげよう。1960年代に日韓の教会の交流に携わっていた李仁夏牧師が1976年の講演で「日本の教会は、韓国教会に連帯するために、その苦悩にあずかろうとして、同労の者が獄につながれた時、韓国に問安の使節を送りました。今日は、こうして、日本キリスト教協議会の諸団体、カトリック教会、無教会を含めて、韓国にいる同信の友のために、祈りと連帯の呼びかけにこたえて、韓日キリスト者が参集しました」<sup>25</sup>と言っている。

また「連帯」という言葉は公式的文書に、つまり、1974年6月の日本基督教団総会議長による文書にも現れているのである。次に引用するが、「73年宣言」の翌年の総会議長文書が重要であろう。ここで明らかのように日本基督教団は「連帯」という意志を表明している（その全文を引用しよう）。

私たち日本のキリスト者は、明治以来の韓国と日本の関係を考えるとき、国家の犯した深い罪の事実と、それに同調した我國民の罪に深い痛悔を覚えざるをえません。しかし、それは、単に過去の事実ではなく、今日も、軍事的、経済的に、韓國民の基本的人權をふみにじり、そ



の生活を圧迫する勢力に加担している者がおり、わが国民の多くは、そのような事実について無関心であり、明確な認識を欠いているといわなければなりません。このような状況の中で、韓国キリスト教会の目ざめた人々は正義の実現と韓国の民主化のため、投獄の犠牲をおかして、信仰の戦いを続けていることが伝えられています。私たち日本のキリスト者は、同じ信仰に連なるものとして、これらを人々やその家族の人々に物心両面の支援を送ることによって、心からの連帯の決意をあらわしたいと思います。諸教会におかれましては、このような事態についての正しい知識をもたれ、韓国のキリスト教会、ことに現在、苦難の中にある人々のためにご加禱していただくことをお願いいたします。尚、連帯の具体的方法につきましては、追ってご連絡申し上げます。1974年6月11日 日本キリスト教団総会議長 戸田伊助 日本キリスト教団社会委員長 井上良雄<sup>26</sup>。

日本の教会で使われていた「連帯」という言葉の用例は「73年宣言」にさかのぼることができる。そこでは韓国の民主化のためにキリスト者の行動を訴えている第三項にこう述べている。すなわち、それが英語では、*"To the Churches of the world: Most of all we need your prayers and solidarity, and we ask you to express our common bond through actions of encouragement and support"*。<sup>27</sup>そして日本語の宣言では「われわれは、世界教会に向かって、われわれのために祈って下さることと、われわれとの連帯感をますます鞏固なものにして下さることを訴える」<sup>28</sup>となっている。それゆえ、「73年宣言」は日本の教会に、韓国の教会との「連帯意識」を与えたと言えよう。これが、日本の教会の関わりが、池明観をはじめとする「韓国プロテスタント・リベラル」との関係に偏るきっかけであったと考えられよう。

- 1 作者の一人である呉在植によれば、WCCには「73年宣言」と「バルメン宣言」とを比較した論文がある。しかし本稿では参照することができなかった。鼎談「『1973年韓国キリスト者宣言』の作成経緯」、韓国基督教歴史学会編『韓国基督教と歴史』（第9号、1998年）、韓国基督教歴史研究所、342-343頁（以下、「鼎談」と略記）  
[좌담회<1973년 한국 그리스도인 선언의 작성 경위> 한국 기독교 역사학회 편 「한국 기독교와 역사」 한국 기독교 역사 연구소]。聖公会牧師、香山洋人は「新しい教会のイメージを求めて」という資料において「73年宣言」を「第二のバルメン宣言」と見なしている。<http://www.rikkyo.ne.jp/web/kayama/pdf/mschart.pdf> (2011.9.30)。
- 2 同上書。
- 3 "Korean Christian Manifesto," *Christianity and Crisis* 33 (July 9, 1973) : 140. ここには、その宣言の一部が1頁分量で紹介されている。日本語の資料は以下を参照されたい。韓国問題キリスト者緊急会議編『韓国民主化闘争資料集—1973～1976』新教出版社、1976年、26-28頁（以下、『資料集』と略記）。
- 4 「鼎談」、343頁。
- 5 巻頭言「預言者的使命とは何か」、『福音と世界』（1974年8月号）、新教出版社、1頁。
- 6 東海林勤「1973年韓国キリスト者宣言」、『富坂キリスト教センター紀要』（第1号）、富坂キリスト教センター、2011年、18-21頁。そこでの「74年5月5日のニューヨーク・タイムズの全面広告に『1973年韓国キリスト者宣言』の英訳全文が出た」（同上書、20頁）という言葉及は鼎談の中にはない。しかし注意を要するのは「英訳文」という言葉である。この宣言の草案は英語で作成され、そこから韓国語と日本語に翻訳されたことを付記して置きたい。
- 7 蔡スイル「1970年代進歩教会社会参与の神学的基盤」、韓国基督教歴史学会編『韓国基督教と歴史』（第18号、2003年）、韓国基督教歴史研究所 [채수일<1970년대 진보교회 사회 참여의 신학적 기반> 한국 기독교 역사학회 편 「한국 기독교와 역사」 한국 기독교 역사 연구소]。
- 8 蔡スイル、前掲書、29頁。
- 9 李ヒョンギ「WC C総会分課報告書に現れた教会の社会参与」、任成彬編『韓国教会と社会的責任』長老会神学大学校出版部、1997年、201頁 [이형기<WCC 총회 분과 보고서에 나타난 교회의 사회 참여> 임성빈 편 「한국교

- 회와사회적책임」장로회신학대학출판부]。
- 10 Jung Young Lee, "Korean Christian Thought," Alister E. McGrath (Ed.), *The Blackwell Encyclopedia of Modern Christian Thought*, Blackwell, 1993, 311.
  - 11 質問者の名前には韓国教会史学者李ドクジュ (Rhie Deok-Joo) と趙イジェ (Cho Yee-Jei) という名前がある。
  - 12 『韓国教会の信条と教理』という書の編集者たちである。cf. Rhie Deok-Joo and Cho Yee-Jei (eds.), *Creeds and Confessions of Korean Church*, HanDeul, 1997.
  - 13 「鼎談」、331-357頁。
  - 14 『資料集』、24-25頁。
  - 15 *Christianity and Crisis*, 140.
  - 16 池明観『韓国民主化への道』岩波書店、1995年、80頁。
  - 17 『資料集』、24頁。
  - 18 池明観は1972年来日して東京大学で学び、74年から東京女子大学客員教授、教授を務め、93年に韓国に帰国した。
  - 19 「鼎談」、337頁。
  - 20 『教団新報』(1973.9.22)、2頁。
  - 21 「鼎談」、345頁。傍点は筆者。
  - 22 「鼎談」、360-361頁。cf. レーマンは「教会の中の小さな教会」(*Ecclesiola in ecclesia*) がキリスト教倫理について思考するための出発点である、と言う。P・レーマン『キリスト教信仰と倫理』(古屋安雄・船本弘毅訳)、ヨルダン社、1992年、82頁。
  - 23 蔡スイル、前掲書、29頁。
  - 24 Cf. Sebastian C.H.Kim (ed.), *Christian Theology in Asia*, Cambridge University Press, 2008, 139.
  - 25 李仁夏『寄留の民の叫び』新教出版社、1976年、191頁。
  - 26 『教団新報』(1974年6月29日)、傍点は筆者。
  - 27 *Christianity and Crisis*, 140. 下線は筆者。
  - 28 『資料集』、29頁。傍点は筆者。
- (こう・まんそん 聖学院大学総合研究所助教)

## カウンセリング研究センター シンポジウム

### 緩和ケアをどのように進めるか

日本社会が高齢化する中、2人に1人はガンで亡くなっているという時代を迎えつつある。このような時代背景のもと、生命の質を重視する緩和ケアの重要性が指摘されるようになった。今回は緩和ケアと宗教の関係について、3人のシンポジストに自らの臨床体験を踏まえ語っていただく。

日 時：2012年1月28日 (土)  
14時～16時30分 (開場13時30分)

場 所：聖学院大学ヴェリタス館教授会室

講 師：河 正子 (NPO法人緩和ケアサポートグループ代表・看護師)  
黒鳥偉作 (津久井赤十字病院内科医)  
竹内公一 (元自治医科大学講師・真言宗智山派僧侶)

参加費：2,000円 定員：100名

#### 聖学院大学への交通

JR高崎線宮原駅から学生バス5分または徒歩15分  
JR川越線西大宮駅から学生バス10分  
JR川越線日進駅から徒歩15分

お申し込み・お問い合わせは  
聖学院大学総合研究所  
TEL：048-725-5524 FAX：048-781-0421  
research@seigakuin-univ.ac.jp



# H.G. アンダーウッド宣教師と韓国そして日本

松本 周

## はじめに

今夏、日韓キリスト教交流史の資料調査および語学研修のために、筆者は韓国ソウル滞在の機会を得た。本稿では、韓国プロテスタント伝道の最初の宣教師Horace Grant Underwood（以下、アンダーウッド宣教師と表記）と韓国、日本との関わりについて学んだこと、また今後の本格的な研究に向けてのノートとして所感を記したい。

## 1. セムナン教会—アンダーウッド記念学術講座

2011年9月3～4日、第48回アンダーウッド記念学術講座が開催された。たまたま筆者の滞在期間中であつたので、幸いにも開会礼拝から最後の交流会に至るまでの全プログラムに参加することができた。同講座はセムナン教会の創設者であるアンダーウッド宣教師を覚え、その名を冠して毎年開催されている、セムナン教会主催の学術講座である。その年毎に主題が定められ、主題についての第一線の研究者を韓国内のみならず国外からも招く形で、講演・ディスカッションのプログラムが計画される。そして驚かされたことに、企画・進行にかかわる多くの部分が、20代30代の教会青年の奉仕によって担われていた。

本年の主題は「時代の使命に沿うキリスト者」と掲げられ、筆者の理解したところでは、公共神学、現代社会に対して教会また信仰者の負うべき社会的責任について、深く論じられた。

特にその時代的使命については、北東アジアの現代社会をふまえる観点から韓国・中国・日本について、それぞれ講演者が立てられ、またコメンテーターも3ヶ国の青年が務めた。日本からの講演者は聖学院大学総合研究所の深井智朗教授、また韓国の講演は長老会神学大学校のイ・ミグク教授がなされ、筆者にとって以前から存じ上げている先生方である上、講演内容も興味深くうかがった。今回取り上げられた3ヶ国をとってみても、

各国の「ナショナリズム」と教会との関係はそれぞれに独自であり、その中で共通性を有する「教会の時代的使命」を語り得るかどうかは、筆者自身の研究領域であるキリスト教社会倫理とも関係して、知的刺激を与えられたプログラムであつた。そしてこれほどの規模の学術講座を教会が開催するというところに、韓国における教会の社会的力強さを感じさせられた。

## 2. 延世大学校

資料収集の関係で訪問した延世大学校の創作者もまたアンダーウッド宣教師である。新村キャンパスの正門から一直線のメインストリートの先にアンダーウッド宣教師の銅像が建っている。



アンダーウッド像

現在の銅像は3代目とのこと。初代の銅像は日本支配時代に戦時の金属供出のため取り外されてしまった。1945年光復後に再建された銅像は、朝鮮戦争時に北朝鮮軍が「アメリカ帝国主義の象徴者」として取り壊してしまった。このアンダーウッド像を巡る変遷に、韓国近現代史が凝縮されている。

そして銅像と日本とのかかわりはこれだけではない。朝鮮総督府は初代の銅像を取り外し、その代わりとして「興亜維新記念塔 朝鮮総督南次郎書」と彫った石碑を置いた。現物がキャンパス内



「興亜維新」碑

に保存されている。

案内してくださった山本文氏（延世大学院 神学研究科博士課程生）は、石碑の裏面に「昭和六年一二月八日」と日本による真珠湾攻撃の日が刻まれているという氏の発見も紹介してくださった。

また延世大学校構内にはアンダーウッド宣教師一家が暮らしていた家が保存され、内部は資料館になって公開されている。

建物内に入っすぐのところに、アンダーウッド宣教師が作成した韓英辞典が展示されている。初代の宣教師は皆、現地語の習得から活動を開始している。この点、日本で『和英語林集成』を編纂した宣教師ヘボンとの並行関係が目される。館内にはそのほかにも当時の宣教活動を窺い知ることのできる様々な資料が展示されていた。

アンダーウッド宣教師の子・孫の活動も紹介されているが、そこでも韓日の近現代史と深く関わる出来事が存している。ソ・ジョンミン氏の著作から引用、紹介したい。「원한경〔注：アンダーウッド宣教師の子息〕は、三・一運動の時の大日本帝国による民間人虐殺と教会弾圧を目撃し、日帝に対して大きな警戒心を持つようになった。彼は堤岩里教会をはじめとするスチョンリ、ファス



アンダーウッド記念館

リなどの虐殺事件を直に調査し、そこで得た知識をまとめ、世界のマスコミと教会の機関に送って大日本帝国の蛮行を糾弾する最先鋒にも立った。」（서정민 『언더우드家이야기』 살림出版社、2005年。訳文は김민경氏による。）

1919年当時の世界情勢下にあって、韓国と日本また米国との関係の中で苦闘し行動する宣教師家族の様子が伝わってくる。ここにもアンダーウッド宣教師と韓国そして日本とのかかわりがあった。

### 3. 今後の研究—世界動向と各国という視点

以上、記してきたことはアンダーウッド宣教師と家族を通して浮かび上がる、近現代史上の諸事件であった。これらの史実は以前から知られていたし、研究も少なくない。しかしそれは韓国キリスト教史、日本キリスト教史、国際政治史といった各々の個別領域での研究にとどまっていたのではないだろうか。

しかし北東アジアにおけるキリスト教史、その各国での展開を捉えようとする場合、従来の各国別また専門分化の研究では全体像を把握できない。その意味では「学際的」、しかし単なる寄せ集めにならないための「総合的」視点を有した研究への展開が必要である。

先に、ナショナリズムと教会との関係が韓・中・日の3カ国で相違すると述べたが、この点な



長老会神学大学校の理念「敬虔と学問の殿堂」の碑  
 ~Pietas et Scientia~ 奇しくも聖学院大学と共通の理念を掲げている。

どはその好例である。19世紀に行われたプロテスタント伝道は〈自治〉〈自養〉〈自伝〉といったいわば共通のスローガンを有していた。けれどもそうした教会が、各国の政治的・社会的状況とどのように結合し、また歴史の中でスローガンの意味が解釈され、受容される中で各国の教会は異なる性格を有していった。韓国は民族独立運動と教会が結びついていった。中国には現在「三自愛国」教会が存在している。日本は「国民的自由教会」（熊野義孝）といった呼称を生み出していった。これらの全体把握は政治史とキリスト教史のどちらを欠いても不可能であり、また各国別研究では不十分である。

今後の研究に取り組むにあたって、韓国・長老会神学大学校と聖学院大学との交流は重要な意味がある。前述のセムナン教会も属する大韓イエス教長老（統合）派の神学校である長老会神学大学校は、韓国最大の神学大学・大学院である。（それは世界最大級を意味するとも語られる。）韓国と韓国キリスト教界を代表する研究機関とこうした学際的かつ総合的な共同研究をなすことは、現代および将来に研究を通して奉仕することにつな

がると考えている。

最後に加えておきたいことは、教会と大学との二つが結びつきをもって存在していることの重要性である。韓国におけるアンダーウッド宣教師の宣教活動を通して、教会が立てられ大学が設置された（また医療活動も行われた）ことと、日本でヘボン宣教師が教会と大学に連なる働き（また医療）をなしたことは、決して偶然の一致ではない。「キリスト者の時代的使命」がそのような形で果たされたということである。この点でも、Pietas et Scientia（信仰と学問）が長老会神学大学校と聖学院大学とに共通したスクールモットーであることは喜びである。

（まつもと・しゅう 聖学院大学総合研究所助教）

## いかに心の世界を学ぶか

2011年7月1日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターの講演会が開催された。

最近では心の時代だと言われているが、ここは目に見えず、奥が深く、分析や解析することが難しい。そのため本講演会では、「いかに心の世界を学ぶか」というテーマで、各専門領域のスペシャリストであり、本学の教員でもある3名の先生方に実践報告も含め講演をしていただいた。聖学院大学大学院教授、精神科医 平山正実氏、同じく本学大学院教授 窪寺俊之氏、本学大学院准教授で、臨床心理士の藤掛明氏である。以下、3名の講演内容を順次、報告していきたい。

### 1. いかに死生学を学ぶか

#### 聖学院大学大学院 平山正実教授

平山教授は、彼自身が現在3つの肉体的トゲを持つ経験をしており（具体的には言明されなかった）、聴講者にそれを説明した上で「自分の問題として死生学をとりあげる」と、一人称の死について取り扱うことを提言した。

#### 1) 今後の人生における優先順位の確定

A) 身体・心理・社会・スピリチュアルなレベル：死に対するイマジネーションを持つことが重要で、死というものを考える場合には、人生に対する優先順位は何なのかを決めることが大切である。死を考え、残された時間をどう使うのか、毎日の生活の中で、人生の座標軸において自分がどこにいるのかを理解する必要がある。B) リビング・ウィルなどの自分の死についての意志伝達：死をきちんと考えておくことのメリットとして、自分の存在を過去から未来へと考えることがある。例えばリビング・ウィルは自分の未来に対する予告であり、財産の問題、人間関係の和解、信仰の問題などについて書き記すことである。それは、自分の未来にかかわると同時に、未来の人々にどう伝えていくかといった内容も含まれる。重要なのは、死に逝く人が、自分の死をデザインできることである。

2) 病気や死に直面した時、どう支え、どう支えられるか

理性として死を学ぶことにより、自分の問題として死のよりどころを、どこにおくのが問題になる。旧約聖書から、死の間際になっても王の指導をし続けたエリシャの例を挙げ、たとえ病気になってもめげずに、自分の職務を全うする態度が評価される。

次にとりあげたのがサバイバー・ギルトについてである。サバイバーは生き残りを意味し、サバイバーが「ああすればよかった、こうしておけば…」と生前の態度を後悔することがサバイバー・ギルトである。特に家族に自死者があるサバイバーの中には、自身を追い詰め、後追い自殺をする者もいる。このギルトの問題は、正常な心理であるが、それをどう乗り越えるかが問題になる。それでうつ状態になる人は少なくない。そのため、それを逆手にとり、将来、後悔を感じるであろうことを、今から備え、後悔のないようにかかわることが重要であるとしている。

#### 3) キリスト教死生学の課題について

A) 自己と他者との和解の問題：旧約聖書の中から、ダビデをとりあげ、彼が息子の死をきっかけに自分の行いを悔い改め、赦しを受けた例が示された。しかし、このギルトの問題に対しては、キリスト教死生学の中で、もう少し検討する必要性についても言及した。

B) 神義論の問題：震災もそうであるが、病気や死がなぜ自分に訪れるのかという問いは人間の理性では答えられないことである。一方では、人間は自分の人生の意味を考えることができ、死と宗教は深く結びついている。私たちはもっと死と人生の意味について考える必要がある。

#### 3) 生命倫理上の諸問題

死生学の研究の中核をなすのは、認識論、科学論である。生命倫理の問題の認識では科学論を用いている。しかし、死生学の生命倫理の問題には、



科学の中のみで解決ができないことがある。人格はペルソナという言葉からきており、対応する、向きあうという意味である。生命倫理を研究するためには、共感性をもつ人格論と、真実を追求する科学的認識論との複眼的な視点の導入が望まれる。合理的、客観的にみる視点、関係性の中でみる視点、この両方の視点をもつことが必要である。死生学の問題にもこの両方の視点が必要になる。

## 2. いかにスピリチュアル・ケアを学ぶか

聖学院大学大学院教授 窪寺俊之

窪寺教授は、何がスピリチュアル・ケアであるか探求するには、まず、定義を明らかにする必要があると言及した。その定義は「人間をどうみるかということに関ってくる」と考えている。

### 1) 心の世界について

心の世界には、学際的な理解が必要になる。①心理学的理解（機能的理解、思考、感覚、感情、意志）、②社会学的理解（群集心理、社会心理）、③宗教的理解（神仏を求める、救済、永遠に生きる願望）、最後に④スピリチュアルな理解（究極的存在への希求、存在の土台、生きる枠組み）がある。特に、③と④について論じた。

③の理解は、人間が神をもとめることにある。特に困難があると、救われたいと思い、何か自分を越えたものに救いを求めようとする。その態度は誰もが持っており、それを理解しようすることにスピリチュアルが関わる。④の理解は、例えば宗教嫌いの者でも、人間は何のために生きているのか、抱えている困難の意味は何であるのか、存在の土台や根底、生きるための枠組みを問いながら生きている。これらの心理的・精神的領域、社会的領域、宗教的領域、スピリチュアルな領域は、どこかでオーバーラップしながら存在している。

### 2) 終末期がん患者の生き方の特徴について

①生きる目的を問う：すべての人が宗教を求めているが、人間の力では解決できないこともある。特に、死後の命を考えた時、また、罪責感な

どにおいても宗教的な理解が関わる。しかし、宗教に批判的とまでいわなくても懐疑的な文化状況にあるときは、宗教への拒否的態度がある。終末期の段階ではこれが大きな問題となる。健康な時にはそれほど切実には思わないものに直面する問題である。宗教に懐疑的な人にスピリチュアル・ケアという概念が有効とされる。特に終末期のガン患者へのケアにである。この領域のケアは文化圏によって違う。キリスト教が強いと宗教的な解決がなされるが、現代では医療技術が発達し、長寿が実現しているので、実はほとんどの国でスピリチュアルについて考える必要が出てきている。特に、看護、介護、教育領域で大きな課題になってきている。体が不自由な中生きていて「何のために生きているのか」と切実に思い「早くお迎えが来ればいいのに」「こんな体は辛いので早く逝かせてほしい」と思うようになる。そういう彼らにケアをすることが必要とされる。つまりその人がその人らしく、生きる意味を見出し、その中で生きることができるようケアが求められる。

②苦悩の意味を問う：例えば、私という人間がいる。そして、その周りには周囲の者がいる。我々は横の関係の中で生きている。一方、死の問題に直面すると、「自分はどこに行くのでしょうか」と周囲の者に尋ねてもほとんどの者が答えてくれない。

非常に強い罪責感を持っていると、自分の人生はこれで良かったのか、自分の人生を総決算しなければならなかったときに罪責感、悔いる、反省する、などを経験する。中には横の関係（周囲の者）では解決できず、縦の関係（神）が必要になる者もいる。神からの赦しが必要になり、その赦しを求めているのである。

③不安、恐怖感をもつ、死後のいのちへの願望：ここでは、あるホスピスのガン患者の例が挙げられた。わがままで、毎日尽くす妻に感謝の気持ちを告げたことがなかった彼は、ある日、「先生、私だめだと思います」「聖書を読みたい」な

どといった。彼に聖書を持って行き、置いておくと、その患者が「聖書って面白いですね」と言った。次の日には、朝昼の宗教放送も聴いていた。そして、「自分はクリスチャンになりたい」と言いだした。そこで「イエスを心に受け入れればクリスチャンになれます」と言い、その患者の手をとり導いた。次の日には、洗礼式をした。しばらくして、その患者の意識がもうろうとなった時に、「先生、私はだめだ、天国に行く、先生が天国に行った時に一番良い席を用意しておくから」といった。その時、やっとその人が自分の死を語る自由が与えられた。十字架に自分の人生を預けることで、自分の人生を全部任せ、自分がどこに行くのか見つかったと考えた。そして、ついにその患者は、彼の妻にも「ありがとう」と言えた。ここでは神との縦の繋がりができ、最後に周囲との横の繋がりができた例として紹介された。

### 3. いかにカウンセリングを学ぶか

聖学院大学大学院准教授 藤掛 明

1) カウンセリングで扱う「心」と「魂」の世界——カウンセリングで死の問題、宗教の問題を扱い得るのか——

かつて、フロイトは「宗教を心のアヘンだ」と言って批判をしていたが、現在は宗教とカウンセリングは関係があるものと考えられている。特に、ユング派の河合隼雄は、死後の世界などを取り扱う時には、カウンセラーに宗教性が必要だと語っているし、賀来周一も、カウンセリングの立場から、キリスト教の価値や意味を扱っている。このように、キリスト教とカウンセリングは共に扱うことができる。

2) 臨床の「知」というスタート地点

臨床の「知」には、3つの観点が重要であるが、その一つが、「相互作用性」である。近代科学の客観主義に相対する原理で、これは行為する当人と、それを見る相手やそこに立ち会う相手との間に相互作用が成立しているとする立場である。

臨床知というのは、相互作用性として、近代科学で扱えなかった問題を扱っている。例えば、患者の夢を尋ねて問題を解き明かす夢分析では、魂の深い流れにそっていく。この夢分析には様々な学派があり、例えば、フロイト、ユング、アドラーらがいるが、ユング派の医者が夢分析すると、患者がユング好みの夢をみはじめる。これは患者が治療者の影響を受け、二人で一緒に夢をみている相互作用性の例である。カウンセリングや魂の世界を考える場合には相互作用性がありえる。また、それが重要である。

カウンセリングを学ぶときには、①個人かシステムかで異なる。他にも、②アセスメントか治療か、③学問か理論か、という相反するものがある。これらのどちらも大切で、両方を学ぶことがよいのである。

カウンセリング全体を考えると、カウンセリングをするときには、人生全体にかかわる視点、職場や家庭のトピックスで見る視点、人生の危機として見る視点などが必要である。人生の未解決問題が統合されていくとの見方をすればよい。生活問題を抱える人がいれば、カウンセリングを学ぶことから、その問題を視野に入れて心理ケアをすることができる。他にも、決めた場所や時間で実施する治療契約などがあるが、治療契約を結ぶメリットを加味し、崩すときにはそれが崩れてしまうことを理解する必要がある。そして、カウンセリングを勉強する人は、学び合うこと、学習者同士で語り合うことが必要で、それが大きな原動力になる。

以上、「いかに心の世界を学ぶか」とのテーマで3名のスペシャリストを招いて行われた講演会は会場にあふれる参加者を得て、盛会であった。

(文責： 越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

\*37ページのアンケート集計結果もご覧ください。



# 〈児童〉における「総合人間学」の試み研究 永井理恵子氏報告 「児童学でよむ ディック・ブルーナの世界」

田澤 薫

2011年度9月26日に開催された今年度第3回目の「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会では、永井理恵子氏（聖学院大学児童学科）が「児童学でよむ ディック・ブルーナの世界」と題して報告くださった。ブルーナが影響を受けた画家の作品については、喜田敬氏（聖学院大学児童学科）が画集を示して解説を加えて下さり、ブルーナ作品とともに作品鑑賞を含む和やかな研究会となった。

以下は、報告内容の概要である。

ディック・ブルーナの代表作である絵本『うさこちゃん』（福音館）の主人公「うさこちゃん」は、講談社から出版されているものでは英訳を採用して「ミッフィー Miffy」と名付けられているが、言語のオランダ語では「ふわふわうさちゃん」を意味する「ナインチェ nijntje」と呼ばれている。

「うさこちゃん」は、シンプルな線で描かれ、大きく正面向きの顔は目と×型の口が特徴であるが、絵本として刊行される前の時期から現在に至るまでの間に随分はっきりした変化が見られる。色彩は限定されており、現実の動物の色として不自然な点があっても、その限定色の範囲で彩色される。

絵本「ちいさなうさこちゃん」シリーズは、1955年に第一作『ちいさなうさこちゃん』が刊行され、1964年に日本語版（石井桃子訳、福音館書店）が発刊となり、以来今日までに全33冊が発表されている。当初は縦長のサイズだったが、1959年以降は15.5×15.5cmの正方形となった。子どもがおもちゃの延長として絵本に出会うことを想定している。使用する色は6色（赤、黄、青、緑、茶、グレー）で、ブルーナ・レッド、ブルーナ・イエローと呼ばれる特定の色しか使われない。一貫して12頁で構成され、左に文章、右に絵という

形式を持っている。1冊の読書時間を10分と設定し、読み切る長さを意識している。

ブルーナは、自身の幼時期を通して得たさまざまな経験や記憶などを持ちつづけ、自分の中にあるそれらのものを作品に表現しているといわれる。言い換えれば、幼時期の「自分」に対して描いているのである。ブルーナ自身の言葉によれば、

「ミッフィーは素直でやさしくてあたたかい、うさぎの女の子。

僕みたいに永遠の子どもなんです。

シンプルで誰にでも理解できるもの、

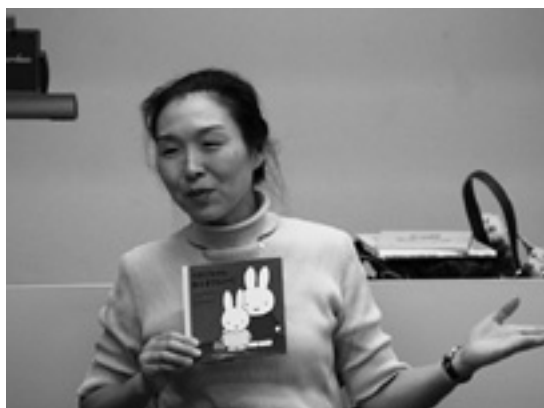
そして、最後にほんとに幸せになれるものを、創像力の続く限り、作り続けるつもりです。」

（『e-mook』宝島社、2011年9月、p.3）と述べられ、「デザインはシンプルであることが一番大事。

完璧であるだけでなく、できるだけシンプルを心がける。

そうすれば見る人がいっぱい想像できるのです。

これがわたしの哲学。」（『ディック・ブルーナのデザイン』芸術新潮編集部編、新潮社、2007年7月、表紙カバー袖）と説明されている。



資料を示しながら報告する永井理恵子氏

ブルーナの絵本は、画家・作家の双方の側面からその特徴の分析できると言われている。絵画の専門教育を受けたことがないが、先人の作品に触れながら自らの表現世界を構築し、筆を使ってワンシーンに100枚以上を描き「この一枚」を模索する。一方の文章は、内容はきわめて日常的なもので、幼時期の体験が大いに反映される。作品には悪人が1人も登場せず、周囲の大人はうさこちゃんを愛し、その人格を1個の存在として認め、うさこちゃんは自分で様々なことを考え行動する。友達が多く、最近では人種の違う仲間や身体的特徴の違う仲間も登場し、そのなかでうさこちゃんは1人で考える。そして常にハッピーエンドとなる。

ディック・ブルーナは1927年8月23日に父アルバートと母ヨハナの長男として、オランダのユトレヒトにて誕生した。本名はヘンドリック・マフダレヌス・ブルーナであるが、母親からディックと呼ばれていたことから、後にディック・ブルーナを筆名とした。

父親のアルバートは曾祖父が設立した出版社を国内有数の出版社として育てた実業家で、自宅には作家や画家が多く出入りし、また絵本や詩集等書物が溢れていた。両親はディックに多くの本を読み聞かせ、また家族旅行にもよく出掛けた。「うさこちゃん」には外出場面が多くみられるが、家族との幼時期の思い出を描いたものであるという。脚に障害があったが、母親が矯正ギブスを取り替えるなどの手当を丁寧に行ったことで、支障ない程度に軽快した。1931年に弟のフリッツが生まれ、一家はザイストに引っ越した。ザイストは美しい土地で、ザイストの家には広い庭があり、ブルーナ一家はここでいろいろな動物を飼ったほか野生の動物もまわりで見ることができる環境であった。作品中のさまざまな動物は、この時の経験が基になっているという。

ブルーナが4～5歳の時に初めて描いた絵はうさぎであった。幼児期よりうさぎを好み、よくう



作家であり、また画家としての面を持つブルーナについて、彼に影響を与えた画家たちの作品の図録を鑑賞しながら考察を深めた。

さぎと遊んだという。男子校であるモラヴィアン小学校在学中は一人遊びを好み、読書や製作活動に時間を費やした。学習では、絵画・生物・語学が得意で、物理・化学・算数が苦手だった。中学校はミッションスクールに進んだ。

1940年に、ブルーナ一家はフェルトホーフエンに疎開をした。ここでブルーナは、ピアノとアコーディオンに熱中する。作品の中にアコーディオンはよく登場するのは、この時の影響とみられる。絵画ではレンブラントやゴッホに傾倒し、よく画集を鑑賞したという。

1943年、ブルーナ一家はロースドレヒト湖畔の小さな家に転居し、ここで「地下生活を送る」と言われている。この時期のブルーナは、風景画を油絵で描きそれをバターや砂糖と交換して家計を助けた。

終戦後に一家はヒルバーサムに移り、そこでブルーナは高校に通うが中退し、ユトレヒトやロンドンの書店で見習修行をしたり、パリの出版社で見習いをしたりするなど、父親の勧めで出版に関係する諸体験をする。17、18歳の頃からロンドンやパリの美術館を端から見て歩き、ピカソ、レジェ、デュフィ、中でもマティスの絵に強い刺激を受ける。「絶対に絶対に、描きすぎではいけない」という発見はこの時期になされたという。

「複雑にしすぎてはいけない。シンプルで見る人にイマジネーションを働かせなくてはならない。デ・スティルを提唱したオランダの芸術家たちの手法に戻りなさい」と主張した。

父親からは出版社を継ぐことを期待されていたが、本のカバーを作り高い評価を受けたことを契機として絵を仕事としたいと考えるようになった。しかし結婚相手の父親に就労を求められ、それを機に父親の出版社に入職した。ここで『ブラック・ベア・シリーズ』の装丁に取り組んでポスター賞を受賞し、大ヒットした。

装丁の仕事を多く手掛けた時期に、『ちいさなうさこちゃん』が生まれる。「うさこちゃん」を描くにあたっては、「絵本の装丁もポスターも限りなくシンプルでなければならない」（『ディック・ブルーナのすべて』講談社、2005年、p.60）という哲学が貫かれていた。「ブルーナカラー」と言われる4つの色を決め（ただし、後にノアの方舟をテーマとした絵本を作る際に緑・茶・グレーを足した）、形は最も単純化しラインは一本線を筆で描いた。文章にもこだわり、韻を踏んでいる。初期の童話作品シリーズには『きいろいことり』、『こねこのねる』、『ぴーんちゃんとふいーんちゃん』、『ちいさなさかな』『こいぬのくんくん』などがある。

1970年に勤めていた父の出版社を退社し、友人とメルシス社を起業し、絵本の創作に専念するようになった。メルシス社は、ブルーナ作品、商品の商標、版權を扱っている。

1990年代には社会福祉に関心を広げ、血液バンク、障害者支援、小児性血友病支援、視聴覚障害者支援、ユニセフや民間ボランティア団体からの依頼を受けて作品を発表し、これらの活動に幅広く関与した。絵本の主題も変化を見せ、「うさこちゃん」が泣いたり問題行動をとったり、社会的ないじめ問題と闘う場面も描かれるようになり、人種問題・障害もテーマとして取り上げられ、主人公の「うさこちゃん」がより人間的な存在へと

変化し、作品主題が社会性や現実感を増してきた。

ブルーナの作品に影響を与えた画家としては、モンドリアン、マティス、デュフィ、レジェ、リートフェルト、カルダーがあげられる。このうち特に強い影響力があったとみられるのが、モンドリアンとマティスである。美術館を訪れるテーマの作品のなかで、ブルーナはモンドリアンの作品を鑑賞する「うさこちゃん」を描いている。ブルーナの根本的な部分はモンドリアンによるところが大きいことを感じさせる象徴的な作品といえる。

モンドリアンはオランダ出身の新造形主義の創始者で、自然は垂直と水平の要素から確立すると考え、その純粋な自然理解に立脚して色彩は三原色のはずだと考える。そのため、作品製作において他の色を足さない。一方のマティスには、ブルーナは戦後のパリで出会う。マティスは、一般にはモローの弟子と考えられているが、宗教絵画で知られるルオーと懇意になり影響を受けあった。マティスは80歳を超えてから新しい自分の世界に挑戦しようと切り紙による作品製作に着手し始め、1952年（ブルーナの絵本の刊行は1953年である）にブルー・ヌード作品のシリーズを発表する。マティスが使用する色は、赤と青と緑の光の三原色を基本にするが限定はない。しかしながら、この両画家から強い影響をブルーナは、絶対に紫を使わないのである。色彩の用法からも、作家の系譜を読みとることができる。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授）

# 韓国・長老会神学大学校との交流—現状と今後—

松本 周

## 1. はじめに

2008年9月19日、韓国・長老会神学大学校と聖学院大学との間で提携協定が調印され、両大学の交流が開始された。現在、両大学では研究交流を主とした二つのプログラムが実施されている。本稿ではその現状を報告するとともに、今後の展開可能性についても記したい。

## 2. 日韓神学会議

2007年8月20日に「日韓神学会議」と銘打ち、総合研究所組織神学研究センター主催による懇談会が聖学院大学を会場として開催された。韓国から、アジア・カルヴァン学会会長（当時）、セムナン教会主任担任牧師の李秀英博士と長老会神学大学校（大韓イエス教長老教会統合派）の金重恩総長（当時）をお迎えした。お二方の先生それぞれが責任を負っていらっしゃる、教会と神学大学校について伺い、その活動の広さ・豊かさに大いに感銘を受けた。

交流協定締結後、2009年3月10日に韓国・長老会神学大学校を会場として、第1回日韓神学会術会議が開催された。「欧米神学とアジア神学」を主題とし、本学総合研究所から講演者として深井智朗教授、コメンテーターとして藤原淳賀准教授（当時）が派遣された。翌2010年の開催予定は諸般の事情で見送りとなっていたが、本年6月に再開を要請し、2012年に本学での開催へ向けて主題等が検討されている。

## 3. 日韓教会交流史研究

当プロジェクトは、2010年より三年間の共同研究として、日韓現代史研究センターの所管により進められている。

2010年度は先行研究の確認と検討を主に行った。そして2011年2月1日に研究会を開催した。同会開催後に、今後の研究の方向性について、検討と

協議が重ねられた。その結果、本プロジェクトは歴史を研究対象とするものの、狭義の歴史学的研究に留まるのではなく、組織神学的視点、また北東アジアの将来形成に資する研究発表を目指すべきことが確認された。

上記の事項をふまえて、本年度は2011年11月に韓国にて国際シンポジウムを開催する。聖学院大学総合研究所からは松谷好明教授と松本が派遣される。

さらに2012年度には、聖学院にて「1945年以降のデモクラシー憲法と両国教会」を主題としてシンポジウムを開催、21世紀の北東アジアにおける教会の役割についても討議する予定となっている。

## 4. 今後の展開について

現時点で具体的に決定されている事柄ではないが、以下のような可能性について発案・検討がなされている。一つには、2012年に開催が計画されているプログラムについて、学内・対外的に幅広く呼びかけ、参加いただく方途の検討がなされている。なお一つは、従前は研究活動を主としてきた両大学の交流を、学生交流にまで発展させていくことである。長老会神学大学校が既に世界各国の大学との間で実施している、短期訪問プログラムや、交換留学生の相互受け入れ等が実現することを願っている。

最近、喜ばしい大きなニュースを受け取った。両大学の交流推進の為に多くご苦労くださった、洛雲海牧師が本年2月に長老会神学大学校より神学博士の学位を授与され、さらに9月からは同大学外国人専任教授に就任なさった。先生の宣教活動そして神学研究と教育のお働きのさらなる充実をお祈りするとともに、お働きを通じて両大学の提携が豊かな実を結ぶことを心から切望するものである。

（まつもと・しゅう 聖学院大学総合研究所助教）



## ミャンマー・カレン族難民におけるキリスト教(1)

宮本 悟

筆者は2011年9月13日（火）から9月15日（木）までミャンマー（旧ビルマ）との国境にあるタイの町メーソットに滞在し、難民としてメーソットとその周辺に住んでいるカレン族の状況を調査した。メーソットに在住し、カレン族を長年支援してきた友人の東輝信氏が筆者を案内し、多くの説明を与えてくれた。カレン族の状況や歴史の知見は、東輝信氏の豊富な知識と経験によって得たところが多い。それに、筆者が著書や論文などから得た知見を加えて、キリスト教を中心に、カレン族難民の状況や歴史を簡略に報告したい。

ミャンマーは1948年に英国から独立したが、その直後から現在に至るまで政府と少数民族の戦闘が続いている。その少数民族の中心的存在となっているのが、ミャンマーの少数民族で最も大きな勢力を持つカレン族である。ただし、約60年間、戦闘を続けてきたカレン族はすでにタイとの国境にいくつかの拠点を持っている程度にまで勢力が衰え、数多くの難民を出す状態になっている。

難民の行き先の多くがタイの難民キャンプである。その難民キャンプを筆者が見学したのは、9月14日（水）である。東輝信氏が筆者を案内してくれた。この難民キャンプはメーラ・キャンプと呼ばれ、おそらく数ある難民キャンプで最もよく知られている。難民の数は3～5万人ほどで、見た目には巨大な山村であるが、その周りは鉄条網で囲まれており、監視のための兵士も配置されている。メーラ・キャンプの住人の大部分がカレン族である。仏教国のイメージが強いミャンマーであるが、カレン族にはキリスト教徒が比較的多く、難民キャンプには教会もあり、教育施設としても使われていた。東輝信氏によると、英語教育も盛んとのことである。メーソットには、日本人や韓国のキリスト教団によって設立されたというカレン族のための学校もあった。

さて、カレン族にキリスト教徒が多い理由は、



メーラ・キャンプにあった教会。

英国統治下のビルマであった時代にまでさかのぼる。現在は多くの難民を海外に出しているカレン族であるが、英国植民地の時代には多数を占めるビルマ族に比べて、カレン族が優遇されていた。アジア経済研究所の研究員である中西嘉宏の著作によると、英国ビルマ州全人口の65.7%をビルマ族が占めていたにもかかわらず、1941年年4月30日の時点における英国ビルマ軍および国境防衛軍27,981名のうち、ビルマ族は3,742名（13.4%）にすぎなかった。それに対して、カレン族は4,782名（17.1%）であった。英国ビルマ正規軍9,877名に的を絞れば、ビルマ族は1,893名（19.2%）であり、カレン族は2,797名（28.3%）である。カレン族がいかに優遇されていたかが分かる。これは、英国領インド帝国で行われていた少数民族によって多数民族を統治する「分割統治」による影響と考えられている。

英国植民地時代に多くのカレン族がキリスト教に改宗していった。カレン族の最初の改宗者は、バプティスト派の米国人宣教師であるジャドソンから教えを受けたコー・タービューであり、1828年のことであった。これは第一次イギリス・ビルマ戦争によって、ビルマが敗北した2年後のことであり、英国によるビルマ植民地化の第一歩が踏み出された頃であった（1886年に全ビルマが英国統治下に入る）。コー・タービューはカレン族の

伝承にある「失われた本」が聖書であるとして、カレン族でのキリスト教の布教に努めた。また、1832年にバプティスト派の米国人宣教師ウェイドがカレン文字（スゴー文字）を考案したことは、ビルマ語を使わずに、カレン語によってカレン族にキリスト教を布教させる大きな力となった。

ビルマ族によって構成されたビルマ独立義勇軍と共に日本軍が1942年にビルマ全土を占領すると、カレン族は連合国軍として日本軍と戦ったとされている。英国植民地下で優遇されてきたカレン族は、英国の手先と認識されてビルマ族に憎まれることもあり、日本占領下ではビルマ族とカレン族の武力衝突も数多く起こった。終戦前に連合国軍側に寝返って独立活動の主体となったビルマ族ではあったが、カレン族はビルマ族とは異なる独立国を目指していた。1948年1月4日のビルマ独立後には様々な反政府組織の蜂起が相次ぎ、1949年1月31日にはカレン族の政治組織であるカレン民族同盟（KNU = Karen National Union）傘下のカレン民族防衛機構（KNDO = Karen National Defense Organization）もラングーン郊外のインseinでビルマ政府との全面衝突に入った。以降、KNUとその軍事組織であるカレン民族解放軍（KNLA = Karen National Liberation Army：KNDOの後身）は、衰退の一途を辿ってはいるが、現在でもミャンマー政府と戦闘を続けている。

このKNUの指導層にはキリスト教徒が多いことが知られている。KNLAで兵士として戦い1997年に死亡した西山孝純も、著書の中でそう記している。フリー・フォトジャーナリストでカレン族の取材をしてきた山本宗輔も、KNUの中央執行委員35名の大半はキリスト教徒で、仏教徒は4名のみであったと著書に記している。しかし、カレン族全体的では、やはり仏教徒が最も多いようである。マーティン・スミスによると、カレン族の大多数は現在でも仏教徒であるという。山本宗輔によると、人口10万人のKNUパブン管区（ミャンマーのカレン州北部）での宗教分布はキリスト教徒が4

割であって、アニミストが3.5割、仏教徒が2.5割である。キリスト教徒のうち、プロテスタントとカトリックの比率は5対3という。ただし、パブン管区はキリスト教徒の比率が多い方であり、その南部にあるKNUドゥープラヤ管区では9割が仏教徒という。地域毎に格差は大きいようであるが、KNUの指導層にはキリスト教徒が多く、一般人には仏教徒が多いと理解できると思われる。

西山孝純も山本宗輔も、宗教の違いは一般的なカレン族社会ではほとんど問題になっていないと語っている。しかし、この宗教の違いは、KNUに分裂をもたらすことになった。1994年12月に約200名の仏教徒カレン兵が宗教的な差別を理由に反乱を起こし、民主カレン仏教徒機構（DKBO = Democratic Karen Buddhist Organization）とその軍事組織である民主カレン仏教徒軍（DKBA = Democratic Karen Buddhist Army）を組織して、ミャンマー政府軍と共にKNUを攻撃し始めた。これが要因でKNUの総司令部があるマナプロウが1995年1月31日に陥落し、タイにも大量の難民が押し寄せた。DKBAは、タイにあるカレン族の難民キャンプをも襲撃し始め、カレン族とカレン族が対立する状態になり、現在も続いている。筆者は、東輝信氏に案内されて、DKBAに襲撃されて焼かれた難民キャンプの跡地も訪ねた。そこにはタイ人による幾つかの人家はあったが、すでに野原か農地に変わっていた。



DKBAによって襲撃された難民キャンプの跡地。



## 参考文献

池田一人「ビルマ植民地期末期における仏教徒カレンの歴史叙述－『カイン王統史』と『クウイン御年代記』の主張と論理－」『東洋文化研究所紀要』第156冊（2009年12月）69-140頁、<<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/32422/1/ioc116005.pdf>>（2011年10月7日アクセス）。

マーティン・スミス著、高橋雄一郎訳「ビルマの少数民族：開発、民主主義、そして人権」（明石書店、1997年）。

中西嘉宏『軍政ビルマの権力構造：ネー・ウィン体制下の国家と軍隊 1962-1988』（京都大学学術出版社、2009年）。

山本宗補『ビルマの大いなる幻影：解放を求めるカレン族とスーチー民主化のゆくえ』（社会評論社、1996年）。

“Karen National Union” <<http://karennationalunion.net/index.php>>（2011年10月7日アクセス）。

（みやもと・さとる 聖学院大学総合研究所准教授）

## 心理相談 グリーフケア・ルーム

こころの悩みや心理的な問題でお困りの方のご相談に応じます。

性格上の悩み、対人関係の悩み、子育ての悩み、職場での悩み、家庭での悩み、進路・適性の問題、暴力・非行・犯罪の悩み、大切な人を失った悲しみ、学校内での生徒への対応



### 相談したいときは…

電話での完全予約となっております。

048-725-5524 聖学院大学総合研究所

（月曜～金曜日 10時～17時）

グリーフケア・ルームへの相談と言ってお電話をください。その際には簡単な相談内容をお話してください。相談日時の予約をお取りします。



### 相談日・時間

毎週 月曜日（祝日は休室となります）

10:00～17:00



### 相談料

1回、1時間 8,000円 医療機関ではありませんので健康保険の適用はできません。



### ご相談にあたって

宗教的な背景のある心理问题や、牧師や信徒への助言（コンサルテーション）にも対応します。ご相談内容については秘密を厳守します。

相談室長 平山正実（精神科医・精神保健指定医）

面接スタッフ 藤掛 明（臨床心理士、聖学院大学大学院准教授）

村上純子（臨床心理士、聖学院大学総合研究所研究技術者）

場 所 赤坂檜町クリニック内  
（東京都赤坂9-2-6 カルム第二赤坂103）



# イギリス短期留学記 —キール、アムステルダム、ケンブリッジ

豊川 慎

この度イギリスに短期留学する機会を与えられ、博士論文で扱ったA.D.リンゼイの政治思想に関する更なる一次資料の収集を第一の目的に、この夏の二か月ほどの間、主にケンブリッジで研究の時間を過ごした。以下紙数の許す限り、夏の研究滞在の報告をしたい。

8月1日の早朝の便で羽田からロンドンに飛び、同日にロンドンから最初の目的地であるキール大学があるストーク・オン・トレントに向かった。キール大学の図書館にはリンゼイが家族に宛てた直筆の手紙や未公表草稿の数々、またリンゼイが投稿した当時の新聞記事の切り抜きなどの膨大な一次資料が保管されている。特別保管所（special archives）の一室で「A.D.Lindsay Papers」と呼ばれるこれらの一次資料に沈潜しつつ、リンゼイの生涯と思想を直に感じ得る喜びを味わった。

「リンゼイ・ペーパーズ」の資料番号は通して249番まであり、その一つ一つには多いもので50以上の手紙などが含まれているから、資料の数としてはまさに膨大なものである。「一覧表」

（Lindsay Papers: A Handlist）を参照しつつ、可能な限りすべての資料に目を通し、どの資料をコピーするかを選別して行く連日の作業は誠に楽し

いものであった。スペシャル・アーカイブズの資料は自分でコピーが出来ず、すべて司書の方にお願ひしなければならないことになっていたため、司書のヘレン・バートンさんには私のために多くの時間を割いて頂くことになり、大変お世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。

10日間ほどキール大学に滞在した後、ストークの町からロンドンを経由してケンブリッジへと移動した。その直前にはロンドン郊外で暴動が勃発していて、瞬く間にロンドン以外の町でも暴動が次々と連鎖的に飛び火し、テレビのニュースは特別番組で連日その様子を中継していた。ロンドンを経由してケンブリッジに行く予定ゆえに、ロンドンで何が起きているのかを理解すべく不安な思いでテレビニュースを見ていた。報道では、黒人青年が警察に射殺されたことに抗議する穏便なデモから一転して若者たちが暴徒化したことが伝えられていたが、多くの解説者の説明によれば、射殺という出来事が引き金となって、イギリス社会がこれまで構造的に抱えて来た失業問題、家庭環境問題、経済格差問題、教育問題、社会道德問題などの社会の歪みとそれに対する若者の憤りが一挙に噴出したのだという。ツイッターなどのソーシャルメディアの使用がそれに拍車をかけ、暴徒の連鎖と化したのであった。ロンドンに端を発した今回の暴動のニュースを見ながら考えさせられたことは、リンゼイが1920年代30年代に主に取り組んだイギリス社会の失業問題と彼が広く社会に訴えたその解決策に関してである。リンゼイによれば、失業問題の根本的解決には社会から自分は不要とされているという疎外感を持っている人々に対しての寄り添い、共感、想像力などが欠かせない。他者の受容、隣人愛の実践である。ちょうど今回の研究滞在の際にリンゼイが1934年に出版した*Christianity and Economics*（豊川慎



フランスの哲学者ベルクソンがリンゼイに宛てた手紙（Lindsay Papers. 144番）



ニコラス・ウォルターストルフと筆者。アムステルダム自由大学にて

訳『キリスト教と経済』聖学院大学出版会刊行予定)の訳文の見直しをも進めていたのであるが、この本は今なおイギリス社会において読まれるべきものだったものだったのであった。

さてケンブリッジで数日過ごした後、オランダのアムステルダム自由大学で開催されるキリスト教哲学の国際会議(International conference on the occasion of the 75th anniversary of the Association for Reformational Philosophy)に出席するため、アムステルダムへと向かった。ニコラス・ウォルターストルフ(Nicholas Wolterstorff)など著名な哲学者や神学者が世界中から150人近く集い、「創造の秩序の将来」(The Future of Creation Order)というカンファレンスのメインテーマのもと、神学、哲学、社会学、自然科学、生物学、物理学、法学など様々な分野から活発な討議がなされた。カナダのトロント留学時代の恩師たちやアムステルダム自由大学哲学部留学時の恩師たち(Dr. Sander Griffioen, Dr. Henk Geertsema, Dr. Govert Buijs)と久しぶりに再会出来たことも感謝であった。

国際会議の開会時にはオランダのキリスト教民主同盟のバルケネンデ前首相(元アムステルダム自由大学教授)が講演し、その中で氏はイスラム移民に伴うオランダ社会における寛容の問題、他者との平和的共存の重要性を強調していた。リン

ゼイには『寛容とデモクラシー』と題する書物があるが、まさにグローバル社会における喫緊の課題として寛容とデモクラシーについて私たち一人一人が真摯に考えなければならないことをあらためて思わされた次第であった。

アムステルダムでの週末にはかつて留学中に毎週午前と午後に通っていた二つの教会に久しぶりに出席することが出来た。午前中はThe English Reformed Churchに、そして午後はオランダ日本語キリスト教会アムステルダム集会に出席した。アムステルダムにあるThe English Reformed Churchの歴史は400年以上と古く、17世紀のピューリタン達に遡る。礼拝の際、教会堂のピルグリム・ファーザーズを記念する大きなステンドグラスに目を向けながら、信教の自由を希求したピューリタン達に思いを馳せる時であった。

自由大学での国際会議の後、アムステルダムから空路でイギリスに戻り、その後再びケンブリッジで研究の時を過ごした。ケンブリッジ大学図書館に連日通い、リンゼイに関する資料の収集やピューリタニズム研究に関する文献のリサーチなどを行った。

研究滞在先としてケンブリッジを選んだ理由の一つはケンブリッジにはトロント留学時の指導教授であった恩師のジョナサン・チャプリン氏(Dr. Jonathan Chaplin)がおられ、私が現在取り組んでいるキリスト教とデモクラシーに関する研究へのアドバイスを頂くためである。チャプリン先生はキリスト教政治思想、政治神学、キリスト教社会政治倫理の専門家で、キリスト教学術研究所大学院(Institute for Christian Studies, Toronto, Canada)で政治理論を教えた後、現在はケンブリッジ大学神学部のメンバーであると同時に、聖書研究で知られるティンダル・ハウス(Tyndale House)内のキリスト教倫理研究所(The Kirby Laing Institute of Christian Ethics)の所長(Director)を務めておられる。チャプリン先生から学問的な教示を得ながら、ケンブリッジで研



パトニーの聖マリア教会内にあるトマス・レインバラの言葉。

究を進めることが出来たのは幸いであった。

さて紙数の関係上、この度の研究滞在の成果は他の機会に論文という形でまとめることとし、以下において、滞在時に訪れたいいくつかの場所を紹介することにした。

リンゼイは17世紀イングランドのピューリタニズムに近代デモクラシーの源泉を見、特にその著『民主主義の本質』においてはピューリタン革命期の議会軍総評議会が『人民協約』などをめぐって討論したいわゆる「パトニー討論」の意義を強調したものであったが、1647年にこの討論がなされたロンドン郊外のパトニー（Putney）にある聖マリア教会（St. Mary's Church）を実際に訪れてみた。教会堂の中には「パトニー討論1647年—クロムウェルとデモクラシー」（The Putney Debates: Cromwell and Democracy）と題する展示コーナーが常設されていて、パネルや映像によって当時ここでどのような討論が行われていたのか、またその現代的意義とは何かということを知ることが出来るようになっている。教会堂にはトマス・レインバラ大佐（Colonel Rainborough, 1610-1648）の次の言葉が掲げられていた。「確かに、イングランドに住む人は、たとえどんなに貧しくとも、最も富裕な人と同じく、生きるべき生命をもっていると思う」（FOR REALLY I THINK THE POOREST HE THAT IS IN ENGLAND

HATH A LIFE TO LIVE AS THE GREATEST HE）。このパトニーの教会の牧師いわく、教会に掲げられているこの言葉は聖書の言葉ではないが、聖書の本質を表しているものだという。

このパトニー討論の速記録を含む膨大な「クラーク文書」（*Clark Papers*）は現在オクスフォード大学のウスター・カレッジ（Worcester College）の図書館に保管されている。司書のジョアンナ・パーカー氏（Dr. Joanna Parker）に連絡を取り、歴史的にも貴重なクラーク文書を見せて頂いた。ウスター・カレッジのスペシャル・アーカイブズの一室で上記のレインバラの言葉を実際に確認したり、1647年の『人民協約』などの文書を手に取って読み、近代デモクラシーの展開にとって重要であった歴史的な文書の数々に直に触れる機会を得た。

オクスフォードでの滞在時にはベイリオル・カレッジも訪れた。リンゼイは若き時はベイリオルのフェローを、そしてその後は長きにわたって学寮長を務め、ベイリオルはリンゼイがその生涯の多くの時を過ごした場所であった。リンゼイを含む歴代の学寮長の絵が飾られているホールや彼がそこで頻繁に説教を行ったチャペルなどを訪れたが、そのチャペル通路には第一次世界大戦と第二次世界大戦で犠牲となったベイリオル・カレッジの学生の記念碑が埋め込まれていて、第二次大戦



リンゼイが長く学寮長を務めたベイリオル・カレッジ





クロムウェルの家の中

時には300名以上のペイリオルの学生が亡くなったという。優秀な学生たちが戦争の犠牲となり、そのことに学寮長として心を痛めたリンゼイの苦悩を感じる思いであった。

ケンブリッジからそれほど遠くないイーリー（Ely）の町にはオリバー・クロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）がかつて住んでいた家があり、ここではクロムウェルに関する非常に充実した内容の展示がなされていた。展示説明の最後に、「ではあなたにとってクロムウェルとは英雄か独裁者か」を投票するコーナーがあり、私は少し考えた後「英雄」に投じた。見たところ、7対3程の割合で英雄が多数を占めていた。

クロムウェルがかつて学んだケンブリッジのシドニー・サセックス・カレッジのチャペルを訪れるとそれはまさにかつてピューリタンの温床と言われたカレッジだけあって他のカレッジとの違いがそのチャペルの質素な内装によく表れていた。ここにはクロムウェルの頭蓋骨が埋葬されていた場所という銘も掲げられている。ケンブリッジ大学のもう一つのピューリタンのカレッジとしても知られるエマニュエル・カレッジのチャペル内にあるピューリタンたちのステンドグラスもまた見事なものであった。

ケンブリッジではEmmanuel Reformed Churchという教会に毎週出席したが、他のキリスト教の伝統を知る機会でもあると思いギリシャ正教の礼拝

にも参加してみた。聖画像（イコン）に口づけをする人々、奥の方で何の儀式を行っているのか、いつまで立ち続けなければならないのか分からずまたいつ終わるともしれない礼拝は同じキリスト教であるとはいえ思っていた以上にプロテスタントの礼拝とは非常に相違したものであった。プロテスタント内にもルターとツヴィングリの聖餐論争を初め、聖餐をめぐる神学的理解には相違があり続けているが、そのような相違をはるかに超えた相違点を実感する機会となり、礼拝と礼典に関してあらためて考えさせられた貴重な時となった。

ケンブリッジには1130年に創建された珍しい円形の「ラウンド・チャーチ」として知られる古い聖墳墓教会がある。現在、「クリスチャン・ヘリテージ」（Christian Heritage）という団体がその管理を担っているのであるが、日本の大学でキリスト教倫理などを教えていることをその団体の創設者の方に告げると、非常に関心を持って下さり、教会の奥の一室でゆっくりと話をする機会を持った。話を聞くとその方（Ronald Macaulay氏）は日本でもかつて知られたフランシス・シェーファアの義理の息子であると言い、自分の妻はシェーファアの娘だという。日本でもシェーファアの本はこれまで数々が訳され出版されてきたことを伝え、日本にもラブリのような若者が集う場所があればという話で盛り上がった。日本に帰る前日の全く偶然の出会いではあったが、実り多い会話の時であり、共に祈って別れた。

今回の研究滞在では、ケンブリッジ大学図書館などでのリサーチと合わせて、多くの人と出会いそして多くの対話や議論の時をもつことが出来、大変充実した実り多い研究滞在の時を過ぎすことが出来て感謝であった。このような研究の機会を与えて下さった聖学院大学総合研究所所長の大木英夫先生にこの場を借りて心よりの感謝を申し上げたい。

（とよかわしん・聖学院大学総合研究所特任研究員）



# ヴィクトリア時代思想セミナー

「ヴィクトリア時代の詩と知識人——「森」とのかかわりにおいて」

「J.S. ミルの道徳論とコールリッジ」

2011年8月7日午後2時から6時、横浜ランドマークタワー内、横浜国大サテライト教室において、ヴィクトリア時代思想セミナーが開催された。同セミナーは横浜国立大学の泉谷周三郎名誉教授を代表（事務局：有江大介教授）に2008年に設立され、今まで相互交流が少なかった人文学、歴史学、社会科学など各分野ごとの研究を総括的に描き出すために、これらの結節点とも言えるJ.S.ミルを軸に研究している。第9回にあたる今回の研究会では、聖学院大学大学院の新井明先生と、横浜国立大学の泉谷周三郎先生による発表があった。

新井先生は「ヴィクトリア時代の詩と知識人——「森」とのかかわりにおいて」と題して講演された。

古来ヨーロッパでは、森は不気味な存在として畏怖されてきた。シーザーの『ガリア戦記』やダンテの『神曲』にも、「黒い森」または「暗い森」に踏み込むことへの不安と恐怖が描かれている。

18世紀になると、技術革新によって森（ドイツトウヒ）は伐採され、切り拓かれる。荒れた森を修復するために、ドイツトウヒの植栽が行われる。グリム兄弟とペローが書いた『赤頭巾』では、少女は（森の化身である）狼に食われても死なない。ターナーやコロドーの描く絵には人間は登場せず、自然が前面に出ている。もはや森（自然）は敵ではなく、人間の味方になっている。

そして19世紀、森は人間にとって親愛なる存在となった。ホーソンの『緋文字』では、森である狼の方からパールに近づいていく。人間はどう生きるべきなのか森（自然）に学ぶ、つまり「師」としての森が描かれる。

質疑応答では、今まで聞いたことがない、新鮮だったなど、参加者から驚きの感想がのべられた。

泉谷先生は、「J.S.ミルの道徳論とコールリッジ」と題して講演された。

3月11日の震災、津波、原発事故を経験した今、

「個人的な幸福のみを追求する事はできない。それぞれの個人と他の生物がおかれている環境全体の保存を維持しながら、個人のよりよい生き方を考慮することが要請される」というスタンスの元に、G.E.ムア、C.テイラー、ワーズワスの著作を中心に、ミルの功利主義論の意義と問題点を提示された。

ムアは「善は単純概念であって定義できないが、善いものは、善い性質や快楽や欲求を含む複合体であって定義できる」という。テイラーは「近代的アイデンティティ」という言葉で、人間という主体、自我、人格にいついての近代的理解の総体を意味しているとし、近代における文化的・社会的大転換をどう理解するのかという問題に取り組んでいる。ワーズワスが『序曲』の中であらわした自叙伝詩は真理の直感的表明に満ち、人間精神の内奥に深く浸透し、彼のきわめて特異な心理的洞察の根源を示していると述べた。コールリッジについては、「心で求める救いを、頭が拒否する分裂状態の中で生き、『老水夫の歌』、『失意のオード』を、さまよえるユダヤ人の枠組みで書き上げた、としている。これらについては、それぞれ研究者たちの論文や著作から紹介された。

講演後の質疑応答も、活発で、有意義なものであった。

（文責：斎藤薫 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2011年8月7日、横浜国立大学サテライト教室）

# 共同研究報告

## 【憲法研究】

### ドイツの基本法と基本権——Grundrechte im Grundgesetz für die BRD——

7月4日月曜日、聖学院本部新館2階集会室において、2011年度第二回憲法研究会が開催された。講師として京都大学大学院法学研究科教授の初宿正典先生をお招きし、「ドイツの基本法と基本権」と題してご講演いただいた。28名が参加した。概要は以下の通りである。

明治憲法を策定するに当たって、伊藤博文らは、プロイセンの欽定憲法をモデルとした。しかし日本国憲法は、ドイツ流の器に、アメリカ産の果実を盛ったといえるほど、個々の条文にはアメリカの影響が多い。

ドイツ「憲法」は、「ドイツ連邦基本法」が正式名であり、「憲法」ではないことをはじめとして、基本権（Grundrechte）を冒頭においていることや、宗教制度に関連するヴァイマル憲法の一部を基本法の構成部分として受容していることなど、主に7つの特徴があげられる

基本権規定の条文数は少ないが、個々の基本権規定の文言は詳細である。ナチスの時代への大きな反省として、「人間の尊厳の尊重・保護が国家権力の責務」であると、真っ先にあげる。続く19条までの基本権を、相当の日本国憲法の条文と比較することにより、詳細さが分かる。ドイツでは、



初宿正典 京都大学大学院法学研究科教授

以前は社会主義との戦いであったが、現在は「戦う民主制のための制限」として、民主制を守るためには結社の自由の制限をはじめとして、組織犯罪防止のためなら盗聴器を仕掛けることも合法になる。

こどもの教育については、「親の権利」であるとし、宗教教育は公立学校において正課であり、親に決定権がある。「信仰・良心の自由」、「意見表明の自由、知る権利、報道、芸術・学問の自由」についても、細かく明文化されている。

初宿氏の発表のあと、特にドイツ基本法における宗教に関する条項をめぐって活発な意見が交わされた。

（文責：斎藤薫 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2011年7月4日、聖学院本部新館2階）

## 【臨床死生学研究】 キリスト教の死生観

2011年7月9日（土）、聖学院大学1号館セミナールームで、臨床死生学研究会が開催された。聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター牧会電話相談カウンセラーで、鶴瀬恵み教会牧師、臨床パストラルスーパーバイザーの堀肇氏から「キリスト教の死生観」というテーマで以下の内容の講演がなされた。

冒頭の序論では、キリスト教の死生学を、①ホリスティックに理解するものと、②概念として理解するものとに分類した。また、生活史における「死」の意識は、大きな危機に遭遇することで覚醒され、説教と神学研究における「死」の意識は、イースター、復活祭、葬儀などで聖書の中の生と死としてよく語られるという。

次に本論では、まず、死生学（サナトロジー）を以下の3つに分類した。（1）医学（死体の調査による死の原因研究、死体の解剖に関する研究）、（2）精神医学、心理学、看護学（死にゆ



堀 肇 鶴瀬恵み教会牧師

く人や死別した人の心理の研究)、(3) 哲学、神学(死及び死と生に向かって生きる人間の研究)である。(3) についてであるが、著名な哲学者の多くは、死の問題、特に死を乗り越えることの苦難について取り扱った。それに対して神学では、聖書の中の終末論や贖罪論でキリストの死が取り扱われてはいても、死の学問は展開していない。むしろ生に焦点を置いていることについて言及している。

その上で、キリスト教の死生観として、(1) 聖書全体では、死の神学ではなく、永遠の命とか、命や生にかかわるものに焦点が置かる。(2) 旧約聖書では、創世記で神の裁きとしての死が書かれ、詩篇では、墮落の後の生命力の欠如・減少、自然なものと書かれている。「イザヤ書」では、人間の生と死を支配するのは神であること、生命の永遠性が明示され、かつ預言的な意味での死が語られている。次に(3) 新約聖書では、死は、「ローマ人への手紙」では神の罪の裁きとして、「コリント人への第一の手紙」では死の扉の問題と死は敵として表され、この「死のとげ」がイエスの復活によって取り除かれるとされている。また、死後の問題は、第一の死として地上での死と、第二の死として終末論的な死があり、死には中間の状態があるという。

次に、プロテスタントの死生観をとりあげた。(1) マルティン・ルターの死生観。ルター神学では死の問題は、彼が修道士になるいきさつや、自身の健康問題、当時の伝染病の流行などがあり重要な問題である。ルターは「死への準備の説教」の中で、生と死について扱っている。(2)

カルヴァンの死生観。キリストの十字架の苦難と死を、神の怒りとして理解することに焦点が絞られている。(3) 現代の神学者の死生観。贖罪論とみる立場、被造性として、作られたものとして死をみる立場がある。

最後に論じたのが、キリスト教死生観を巡る課題である。(1) ターミナルケアにおける牧会者の務めがある。具体的には、スピリチュアルケア(広義の霊的ケア)と、パストラルケア(宗教的な霊性を含む狭義の霊的ケア)があり、クリスチャン霊性問題では、神との関係性で考えられ、神との和解、隣人との和解、自分との和解などが必要とされている。他にも(2) キリスト教のギリシャ的な靈魂不滅論、(3) 生と死の倫理(脳死、安楽死、自殺、人工中絶、死刑など)、(4) 死の科学化や周辺化、(5) 火葬の問題などがあげられた。

以上が、「キリスト教と死生観」とのテーマで講演された内容である。

(文責: 越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2011年7月9日、聖学院大学1号館セミナールーム)

### 【ラインホルド・ニーバー研究】 ニーバー「秘義と意味」(Mystery and Meaning)をめぐって

10月3日、第2回ニーバー研究会が催された。参加者は27名であった。講演者は本学大学院教授



高橋義文 聖学院大学大学院教授

高橋義文氏であった。これまでの研究会は依頼人に講演をしてもらうというスタイルであったが、今回はニーバーのテキストにそって議論を深めていこうとする〈勉強会〉に近いスタイルが初めての試みとして採用された。テキストはニーバーの「秘義と意味 Mystery and Meaning」であり、来場者には高橋氏自身による翻訳と解説が配布された。

高橋氏は「秘義と意味」を次のように要約する。

①人間存在の究極的な問題は、それに意味があるのかどうか、それが理解できるかどうか、である。②人間存在は、矛盾と不調和に満ち、秘義の半影 penumbra に包まれている。秘儀にもかかわらず意味があり、意味は秘義に覆われている。それは、人間をめぐる、創造、自由、罪の三つ秘義分析に明らかである。③それゆえ、その正確な理解は、少なくとも合理主義や神秘主義では不可能である。合理主義は、理性に頼るため理性を超えた秘義をとらえることができず、他方、神秘主義は、秘義を認めはするが秘義に隠された意味を捉えることができないからである。④人間存在をめぐる秘義と意味の解明の手がかりは、キリストの出来事における啓示への信仰である。秘義に包まれている意味が、秘義の存在を損なうことなく明らかとすることができる。⑤この洞察は、謙虚な信仰生活の証しによってのみ立証される。しかし、その洞察は、人間の普遍的な経験に合致しており、一定の普遍的妥当性をもつものである。

高橋氏によると、この論文はニーバーの思想の本質的な特徴が凝縮されている。それは以下の点に見出されるという。①ニーバーが重視した〈意味への問い〉（ニーバーにとってキリスト教は、

人間存在と歴史に意味を見出し、与える宗教であった）。②秘義と意味の弁証法と人間の精神の理解の独自性。③キリストの出来事（啓示）の決定性。十字架の中心性。④弁証学的意義。つまり、人間存在と歴史の理解についてのキリスト教の洞察の弁証法の試みとなっている。ニーバーは、合理主義や神秘主義の哲学思想に対し、もうひとつの実在理解を示し、その妥当性を主張している。特に自由に根を持つ罪の秘義は、普遍的に経験されるものである故に、それへの答えは、一つの立場を占めていると主張している。この見方が、ニーバーのキリスト教政治的現実主義の根幹をなしている。高橋氏によると、ここに、ニーバーの現実主義の深みの次元が見られるのであり、ニーバーの神学はもとより、現実主義を取り上げる際に、忘れてはならない議論であるとされる。

高橋氏の発表の後、コメンテーターを担当した本学総合研究所長の大木英夫氏が「秘義と意味」の重要な箇所をピックアップし、問題として取り上げ、その都度来場者の質問を受け付けるというかたちで本日の会は進行し、終了時間の午後7時を迎えたのであった。

（文責：兼松誠 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2011年10月3日、聖学院本部新館2階）



高橋義文教授による解説をもとに議論を深めた。



# 総合研究所 News

## 牧会サマーセミナー 「傷ついた魂の癒やしを求めて」報告

2011年度の牧会サマーセミナーが聖学院大学を会場に9月2日（金）の9時から16時30分まで開催された。さまざまな教派の牧師8名が参加した。

今回で3回目となる牧会サマーセミナーは、カウンセリング研究センターが2008年度に実施したアンケート調査に基づいて、多くの課題に直面している牧師のリトリートと研修の機会として開催されている。毎回、講義と小グループの話し合いによって構成されている。

### 講義

講義Ⅰは、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター講師の堀肇先生による「傷ついた隣人への癒し」という主題の講演であった。ルカ福音書10章30-37節の「よきサマリア人の物語」をテキストに、希薄な人間関係の中で傷つけ傷つく現代人の人間関係の病理を分析し、「良きサマリア人」に傷ついた現代人を癒すメッセージがあると語られた。とくに「隣れに思う」という言葉の原語には、内臓が揺さぶられるほどに他者の痛みに共感するという意味があり、復活のイエス・キリストに傷か残っていたように、イエス・



堀 肇 鶴瀬恵みキリスト教会牧師、臨床パストラルスーパーバイザー



藤掛明 聖学院大学大学院准教授

キリストご自身が傷ついた癒し人であることを強調された。

講義Ⅱは、聖学院大学大学院准教授の藤掛明先生による「平時のメンタルヘルス、非常時のメンタルヘルス」であった。ストレスを取り上げ、ストレスをいかに知り、対応するかが重要であることを語られた。ストレスを受け止めつつ、ストレスをためない方法のひとつひとつに参加者はうなづくことしきりであった。

午後は、2つのグループに分かれ、上記の講師のほか、平山正実、窪寺俊之教授、今回とくに参加いただいた大学チャプレン、菊地順教授、またカウンセリング研究センターカウンセラーの村上純子先生がグループに入って、それぞれの参加者の言葉に耳を傾け、アドバイスをされた。

### 分団と全体協議

各分団の報告は概略次のとおりであった。

1) 疲労を感じている牧師が多くいる。牧師がひとりで問題を抱えて、孤立している。それで牧師が牧会から離れてしまったり、自死の問題が発生している。教団などが組織として牧師の問題を取り組むことがほとんどない。大学と教会が交流する中で、牧師をケアするシステムを構築できないか。牧師が継続して使命を果たせる環境を整えることが課題である。

2) 精神的に病んでいる方が教会にこられたと



きどのように対処したらよいか分からない。病気についての知識が必要である。また牧師が一人で関わるのではなく、教会でチームを作り全体で関わる必要がある。

3) 「がんばる」ことでうつ病になることがある。一方でからだを打ちたたくことによって前進することがある。この二つをどのようにバランスをとったらよいか。

4) ストレスに対する細かい配慮が必要であることがわかった。

また全体協議の場での講師からのアドバイスは下記のとおりであった。

1) 悩みを語ることが大切である超教派のグループなので、自由に語り、自分を見つめなおす機会となる。

2) 教団、教派で研修があるが、牧師のスーパービジョン、あるいはスピリチュアルディレクションのシステムを持っているところがない。またひとつの教団の中だけでは、利害関係があつてうまく機能しないということがある。北欧では牧師のリトリートの制度がある。企業、看護などの世界では「研修センター」をもっている。カトリックでは、スピリチュアルディレクションをする司祭がいる。プロテスタントの教会にはほとんどない。大学などの第三者機関が必要となっている。

## 参加者へのアンケートから

### 1. 講演Ⅰ（堀 肇先生）についてご感想をお聞かせください。

- ・現実の生活に則した内容でとても参考になった。今からすぐにでも実践したい。心のあり方について確認できた。
- ・造詣の深い話に感銘した。とりわけ、キリストご自身の傷が満たされなかったように私たちの傷を傷付き苦しんでいた人たちのために用いてくださった。
- ・説教形式での講演はとても良かったです。強盗＝力の説明にはいろいろなことを気づかされました。
- ・「強盗的な力」によって傷ついているという視点は発見でした。「人格の基底」が失われている

る人に自分も該当している感じがします。

- ・牧師の傷が「包帯」となっていくという言葉に癒やされました。傷があってもいいのだ、あった方がよいのだと安心した。
- ・教えられたことが多くて本当に感謝でした。何を心がけてどこを目指していったらいいのか教えられました。自分自身の傷を用いられるということに励まされました。本もご紹介いただいたので読んでみたいと思います。もっとこういう学びを深めたい。
- ・「中断」について考えさせられました。仕事優先的な生き方にならないようにと思います。

### 2. 講演Ⅱ（藤掛 明先生）についてご感想をお聞かせください。

- ・今、問題を抱えている教会の方々に実践してみようと思った。とても具体的でストレスに対し自分からも自分を見直したい。
- ・ストレスについて深く考えさせられ、平素と非常時の相違についていろいろと考えさせられた。
- ・気づかなければならないことを整理して下さって良かったです。
- ・ストレスへの対応が「数で勝負」とか「仕様もない気晴らし」など、ヒントをいただきました。
- ・非日常の中に自分の日常を作り出していくことが自分を支えてくれることに気づいた。
- ・相談を受けることが時々ありますが、先生のおっしゃるように答えを求めなくて聞いてほしいということ、その通りだと思った。「語って



教派を超えて8名の牧師が集まった

もらうことに意味がある」ということを大事に  
思いながらいきたい。

- ・抱えているストレスを意識することが大切だな  
と思った。

### 3. 分団会についてご感想をお聞かせください。

- ・いろいろと率直に分かち合えた。また、尋ねた  
ことも尋ねられてよかった。
- ・全く違う教団、教派の方々とお話しできてとて  
も勉強になった。自由を失う信仰ではなく、お  
互いを認め合う自由ということを学んで視野を  
広げてもらったと思う。
- ・3名のスタッフの方が列席され適切なアドバイ  
スをいただきました。
- ・個々の人の話を良く効いてくださり、意見も出  
して下さってよかったです。
- ・具体的な教会の場での取り組みを聞けて励まさ  
れました。
- ・他教団の方々のお話には興味が湧いた。いろい  
ろな制限の中でお仕事をされているのがわかっ  
た。だからこそ、福音を語ることが重要なので  
しょう。
- ・キリストにある自由を生きるということを考え  
させられました。

### 4. 講演者のご希望がございましたらお答えくだ さい。

- ・聖学院の選択に期待しています。
- ・死に臨んでいる方が、自分の死について話して  
いただけたら。(難しいでしょうが)
- ・平山正実先生。
- ・太田和功先生「霊的形成について」。

### 5. 牧会サマーセミナー開催時期につきまして、 ご希望がございましたらお答えください。

- ・今年は例外ということでしたが、レポート・参  
加費の支払期日がもう少しあったらと思う。参  
加理由レポートの使い道がわかると書きやす  
かった。
- ・この時期が良かったです。
- ・8月～9月。
- ・私にとっては良い時期でした。

- ・9月10月。
- ・夏休み、冬休み、春休みの時期。

### 6. その他、お気づきの点がございましたらお答 えください。

- ・日本の教会のあり方や日本の宣教について、新  
たな視点を知ったように思いました。自分で考  
え付かなかったことなので感謝しています。
- ・私自身はこの集まりがグリーンカウンセリング  
の場と思い出席しました。年配になり、思い違  
いや勘違いが多くありますが、励まされたこと  
に感謝します。
- ・セミナーのPRをもっと広げてください。

#### カウンセリング研究センター講演会

#### いかに心の世界を学ぶか

#### 実施結果—アンケート集計結果の概要

- … こころの健康
- … メンタルヘルス
- … 魂への配慮
- … スピリチュアル・ケア

いろいろな分野で、いろいろな言葉で、「こころ」についての学問と臨床が発展してきました。また、社会で大きな危機が起きると、必ず「こころのケア」が取りあげられます。

私たち一人一人が、どのような方法で、どのような場で、それらを学んでいくことができるのか。そのヒントとなるシンポジウムにしたいと思います。

日時 2011年7月1日(金) 14:00～16:30

場所 聖学院大学ヴェリタス館教授会室

#### 【プログラム】

主催者挨拶 阿久戸光晴 (聖学院大学理事長・  
学長)

講師紹介 堀 肇 (鶴瀬恵みキリスト教会牧  
師・臨床パストラルスーパーバイ  
ザー・聖学院大学総合研究所カウンセ

リング研究センター講師)

## シンポジウム

「いかに死生学を学ぶか」

平山正実（聖学院大学大学院教授）

「いかにスピリチュアル・ケアを学ぶか」

窪寺俊之（聖学院大学大学院教授）

「いかにカウンセリングを学ぶか」

藤掛 明（聖学院大学大学院准教授）

話題提供（私の学び方）

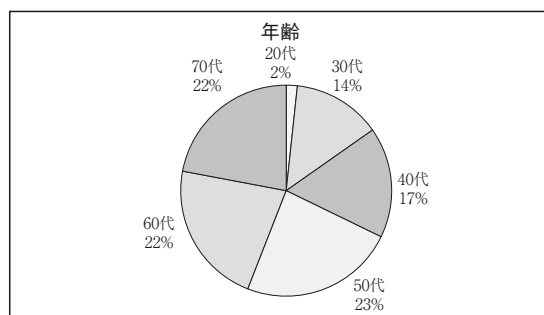
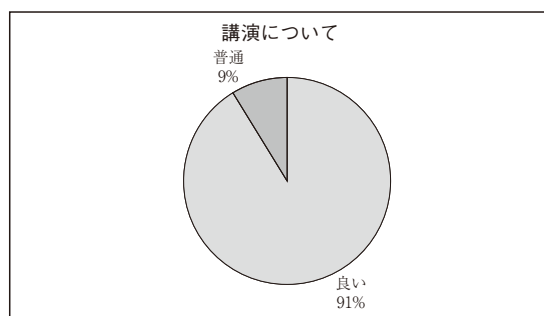
戸村甚榮（牧師）

高野みどり（聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学博士後期課程）

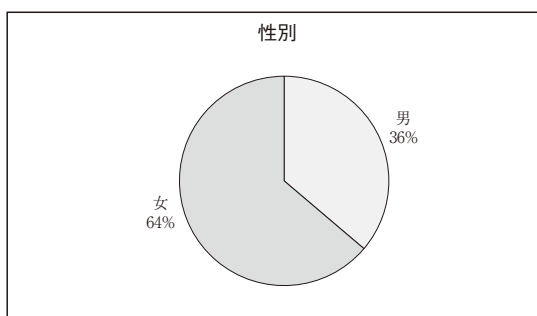
## 質疑応答

### 【結果の概要】

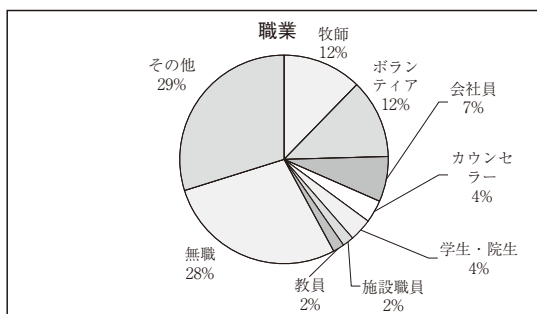
- ・参加者の人数は、126名。内、アンケート回答者は60名。
- ・講演について、「良い」が91%と大半を占め、高い評価を得た。
- ・自由意見では、「大変勉強になった」「もっとお話を聞きたかった」「時間が短い」など。



\* 回答者の年齢は50代、60代、70代が多かった。ついで40代であった。

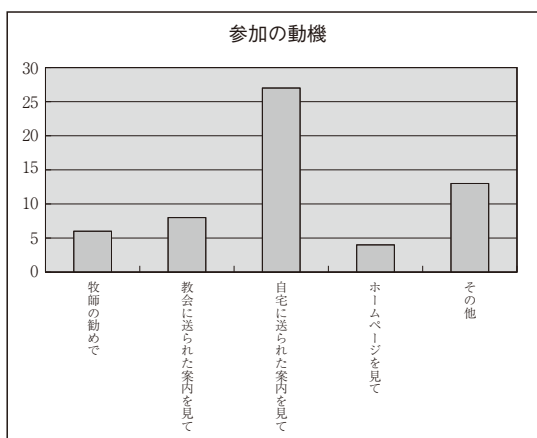


\* 回答者の性別は女性が6割以上を占めた。



\* 職業別には無職が一番多く、つぎに牧師、会社員などであった。

\* その他としては「看護師」「セラピスト」「牧師夫人」「伝道師」などであった。



平山正実 聖学院大学大学院教授

- \*参加の動機として「自宅に送られた案内を見て」が最も多く、次に「教会に送られた案内を見て」だった。
- \*「その他」の内容は、「前回出席して」「学内で知って」「友人からの案内」「先生のブログを見て」など。

## リクエスト

- ・3人の先生方のお話を、それぞれもう少し深くお聞きしたかったので、次回「死生学」「スピリチュアル・ケア」「カウンセリング」関連で講演会を。
- ・平山先生の生命倫理上の諸問題、とりわけ患者と医療関係者の倫理部分についてもう少し深くお聞きしたい。
- ・窪寺先生の「スピリチュアル・ケアを学ぶ」にとっても関心があります。
- ・いかに心の世界を学ぶか。
- ・認知療法の理論と実践に関して学びたい。
- ・心の健康、魂への配慮、死生学について、また聞きたい。
- ・いかに死生学を学ぶか。
- ・平山先生のキリスト教死生学の課題について、詳しくお話が聞きたい。
- ・スピリチュアル・ケアこれからも学びたい。
- ・スピリチュアル・ケアについて。
- ・心の問題解決における、宗教的要素について興味があります。
- ・阿久戸学長の話が聞きたい。
- ・平山先生。
- ・窪寺先生。
- ・藤掛先生。



窪寺俊之 聖学院大学大学院教授



藤掛 明 聖学院大学大学院准教授

- ・堀先生。
- ・島蘭進さん。高木慶子さん。

## 自由意見

- ・もっと学んでみたいと思いました。講演は各テーマ毎に時間が少なかったもので、これを機に聖学院で講座を受けたり、シンポジウムなどに参加してみたいです。自分はケアされる側がほとんどだと思うが、生かされている間はケアをする側にもなってみたい。どのようにしたら良いケアができるようになるか学んでみたい。
- ・高齢の両親との三人暮らしで、両親（アルツハイマーやガンなど）の介護をしています。残り少ないであろう両親の支えとなるよう頑張っていますが、自分の方が折れそうになることが度々です。
- ・学び方の実施について提案があれば参考になる。特にスピリチュアル・ケアについて具体的な日時、費用など教えてほしい。
- ・母が高齢ですが、神を求めているのかどうか分かりませんが、週に一度訪問のたびに短く礼拝をしています。母のためにできることは何か？と考えました。私につきあってくれている母に感謝しておりますが、年を重ねるごとに誰でも神を求めてくれたらいいのになあ…と思いました。本日はありがとうございました。
- ・心の中、頭の中が燃やされるような講演だった。もっと学びたい、もっと掘り下げたいと自分の中でふつふつとわきたつような思いが生じる。これまでずいぶん勉強させていただきました。自分を肯定する力、神から肯定される実感、他者を肯定する力、全て力まずに当然のこ



ととして、そうできるように祈る日々です。

友人から神様はなぜ、弱者（津波で亡くなった多くの老人たち）を苦しめるのか？と尋ねられた。うまく答えることができない。

- ・宗教に関わりのない施設で今日のような課題に関わっていく場合、宗教にあたる部分をどのように受け入れて（宗教色はダメといわれている）ケアにあたっていけばいいのかその辺の知りたかったけど・・・ムリかな？
- ・多くの方のお話が聞けて、楽しく有意義でした。ありがとうございます。体験からのお話はとても分かりやすいです。
- ・お三人の先生お一人お一人がすばらしい先生でいらっしゃいますので、短い時間にお話いただくのはもったいないと思いました。もっと詳しく掘り下げたお話を伺いたく思いました。でも、この機会を与えてくださって、ありがとうございました。
- ・大変良かったです。もう少し長い時間、それぞれのお話を伺いたいくらいでした。シンポジウムの参加は初めてでしたが、参加して良かったです。ありがとうございます。
- ・カウンセリングで心と魂の問題を扱えるという藤掛先生のお話が心に残り、勇気を頂きました。平山先生、窪寺先生、阿久戸先生、堀先生、皆様お一人一人素晴らしい“ことば”を持っておられる先生方のお話を聞くことが出来、感激いたしました。
- ・一人一人の先生方のお話の時間が、もう少し長かったらと思いました。なかなか聞く機会のない内容だったので、とても良い時間でした。ありがとうございます。



定員を超える126名の参加者が集まった。

- ・お一人当たりの講演時間がもう少し長くても良いのではないのでしょうか。それぞれの講師のお話をもう少し深くお聞きしたいです。かなりの人気（？）の模様ですので、もう少し人数の入る会場でも良いのではないのでしょうか。（ただ、受ける側としてはこの程度の広さと人数が良いのですが）
- ・とても参考になるシンポジウムでした。心の世界といっても様々な方面から見ること、学ぶこと、考えることが出来ることを改めて感じる事が出来ました。心の世界により興味を持ちました。講師の方々のお話をもう少し伺いたかったです。
- ・それぞれの先生方の内容は濃く、お一人の先生の持ち時間が幾分短いように感じました。しかし、多数の対象ではいたし方ないのか、濃い導入という感じなのかと思いました。
- ・魂の癒やし、犯罪被害者についてのケアが声高くなされることを望みます。ただ、一人傷をかかえている事が多い。被害者なのにさげすむ、好奇の目にさらされ、より傷つく。受けるものとして、信頼できるカウンセラーと出会うことがないのはどのようなになるのか、この世界について心配でもある。
- ・深い話にもかかわらず大変わかりやすいお話でした。話の内容も素晴らしかったのですが、それ以上に先生方の人間性や人格の豊かさから「心を学ぶこと」の本質や行き着く先を考えさせられました。死生学やスピリチュアル・ケアは理論だけではなく、人間性が重要であることを思いました。心で（魂で）学べたすばらしい会をありがとうございました。
- ・宗教、尊厳死、緩和ケア、医療の中で出会った方々によって、また私が私に出会っていく時間でもあり、大切にしたいと思います。どう支えてあげられるか、傾聴できる力（心）を学んでいきたいと思います。今日はありがとうございました。
- ・ここで学んだことをさらに深めるためにはどうしたらいいか。次のステップを教えてもらえればうれしい。高野さんの話は面白かった。
- ・高野さんのお話は興味深かったです。人生のス

トリーと学びが統合されて、ご自身の歩みが確かにひろがってきた。喜びが全身から感じられて、素敵だなと思いました。

- ・地方都市でのエクステンションをして欲しいです。せめて東京都内の交通の便利なところで開講していただければ出席しやすいです。しかしながら今回の取り組み、ご開講ありがとうございました。
- ・キリスト教カウンセリング、スピリチュアル・ケアについて、さらに学びを深められるセミナー、シンポジウムを続けてお願いします。
- ・誰にとってもかけがえのない心の世界をどのように学んでいったら良いか？を様々な方向性から、平山先生、窪寺先生、藤掛先生、戸村さん、高野さんにお話しただいて、とても参考になり、とても豊かな学びになり、これからは「心の世界」を学び続けていきたいと思います。「人間から学ぶ」を大切に学んでいきたいと思っています。ありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。またよろしく願います。
- ・シンポジスト間の意見交流をききたいと思います。そのためには、少なくとももう1時間必要かと思います。
- ・埼玉カウンセリングセンターによる、傾聴講座の延長線上の活動として、県立がんセンターで緩和ケア病棟でのデイサービスボランティアと災害時のメンタルサポーターをしています。まだ未熟者ですので悩みが多く、困惑しております。ですので、諸先生のご講義に接し、とても参考になりますので、今後ともよろしくお願いします。
- ・三人の先生方のお話が聞けて良かった。真剣にさらに学びたいと思った。ありがとうございました。
- ・とても有意義な時間でありがたかったです。さいごの「入門書」に関するお話もここに響きました。
- ・年齢的にも、どの話を聞いても信実性があり、実感がこもっていてとてもよかったです。
- ・心の世界を学び始めるガイダンスとして、みんなに勧められると思います。

- ・メンタルケアというがスピリチュアル・ケアへと消化しなければ本当のメンタルケアにならないと思う。
- ・藤掛先生のコラージュを実際に教えていただきたいと思いました。
- ・すばらしい学びを本当にありがとうございました。
- ・限られた時間なので、ガイダンス的でした。もっともっとお聞きしたいです。
- ・一人一人の時間が短く、ちょっと消化不良な感じでした。
- ・もう少し分かりやすい話が聞きたかった。
- ・いつも思うことであるが、講演者によって与えられた時間内を守る方も居れば、（平気で）オーバーされる方が居る。人生＝時間の集積と考えるとやはり時間を守って話して欲しいと感じました。
- ・最後列の席で、パソコンのキーボードをカタカタといわせて打っている音が気になりました。

---

聖学院大学総合研究所 Newsletter

Vol. 21-3, 2011

2011年11月30日発行

発行人 大木 英夫

発行所 聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1

TEL:048-725-5524 FAX:048-781-0421

e-mail: research@seigakuin-univ.ac.jp

Homepage: <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>

---

## 聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1-1

Tel : 048-725-5524 Fax : 078-781-0421

E-mail : [research@seigakuin-univ.ac.jp](mailto:research@seigakuin-univ.ac.jp)

Home Page : <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>

---

## Seigakuin University General Research Institute

1-1, Tosaki, Ageo-shi, Saitama-ken, 362-8585 Japan

Phone : 048-725-5524 Fax : 048-781-0421

E-mail : [research@seigakuin-univ.ac.jp](mailto:research@seigakuin-univ.ac.jp)

Home Page : <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>